





西説内科撰要卷四

遠西

玉函涅斯垓我爾德兒著



日本 津山 宇田川玄隨 晉 譚

鑿官法眼挂川甫周國瑞 閱

諸氣篇第七

人若シ偶其身體ニ於テ。一箇ノ柔ニ腫脹スル處  
アルニ遇テコレヲ推ストキハ陥塌シテ他ニ移  
リ。コレヲ放テハ復故ノ如ク。形狀一ニ試ニ胞ヲ  
把テ。氣ヲ以テコレニ充テ、コレヲ外ヨリ切按

撫循スルガ如クナレバ。其胞中膨然タルヲナ  
ス。以ノ者ハ。固ヨリ是風氣ノ致ス。死ナルヲ  
常ニ檢シ知ルニ因テ。今其人身ニ在テ發スル所  
モ亦然ル。ヲ知テ。コレヲ風氣ニ属シ。或ハ噎氣  
ニ因テ許多ノ風氣ヲ吐洩シ。若クハ直腸ヨリシ  
テ轉シ出ス。所皆是風氣ノ致ス。死ナルヲ知テ。  
コレヲ風氣ニ属シ。或ハ腹中雷鳴スル毎ニ。輒亦  
風氣ノ致ス。所ナルヲ知テ。コレヲ風氣ニ属シ。  
更ニ肉中骨節ノ間痛ヲ有テ。逆歴游移シテ處ヲ  
定ナルヲモ。亦コレヲ風氣ニ論シ。又人時有テ寒  
涼風氣ノ中ニ行立シ。又ハ道塗ニ坐卧シテ痛ヲ

来スモ。亦算シ得テコレヲ風氣ノ病ニ属スルナ  
リ。羅旬ニコレヲ拂刺都私ト云。

右第四十九章。諸氣ノ大較ヲ論ス。

夫諸風氣ニ属スルノ病。其種類ハ十八多キニ  
因テ之ヲ思フニ。其起原固ヨリ一ナラサルナリ。  
其標証ニ及テハ。同ク此風氣ヲ將出シ来ルカ故  
ニ之ニ属スル者斯ク衆多ニシテ。其治法ニ至テ  
ハ。大ニ區別ノ殊異ナルヲアルナリ。若シ槩シテ  
惟其風氣ノニ是の識トシテ。是ヨリ發揮擬議シ  
テ治療ヲ施ント要スル時ハ。其錯誤ヲ致ス。甚  
多シト知ヘシ。○是ヲ以テ余諸風氣ニ係ル者ノ

中ニ就テ。其最彰較ニシテ必ス識ヘキ者ヲ舉テ。其種類ノ原ク所ヲ分別シテ。是ヲ歷示セントス。

右第五十章。諸氣ノ病因ヲ論ス。

諸般ノ腐敗變壞スルノ動。烹釀煎熬スルノ擧。攪擾沸騰スルノ事。諸物モシコレニ逢トキハ。從來其中ニ空氣ヲ含蓄セルヲ曾テコレナキ者ト雖モ。皆能ク是カ為ニ許多ノ風氣ヲ將出シ來ルナリ。諸物コレ中ニ訛含蓄連埵律窟ノ空氣和蓋シ人身中ノ諸液其自己ノ性ヨリシテ進テ腐壞スルニ至ルノ質アルカ故ニ。其風氣腫ヲ發スルヲ得ル處ハ。恒ニ其腐壞液ノ在ル處ニ於スト知ヘシ。其

腐壞ヲ假テスシテ。風氣自ラ能ク其腫ヲ發スルハ。只是胸邊ヲ然リトスルノニ。○若シ只其腫ヲ消スルノ策ヲ運スルニテハ。百計スト雖モ勞シテ効ナキナリ。其腐壞液ヲ除クヲアタハス。其方ニ憂敗シ進ムノ勢ヲ遏止スルヲ無カ間ハ。徒ニ治療ヲ費スルニ。○其コレヲ療スル法。水銃法ヲ用テ藥ヲ沃シ入レ。以テ其空間ヲ淨滌スルヲ宜トス。即チ燒酒ニ乳香ヲ和調シ。コレニ加ルニ水ヲ以テスルヲ。多少其疼痛耐忍スベキニ至テ度トス。此術ヲ施ントセハ。便チ是ヲ斷開シテ。水銃法ニテ前ノ如クスヘシ。但シ其創口ヲシテ密

閉セシムルヲ宜トス。即チ乳香ト燒酒トヲ用テ  
 蒸慰ノ術ヲ施スヘシ。然トモコレハ氣候寒涼ノ  
 國ニ施スコトナリ。若シ夫レ温熱ノ地ニ於テハ  
 宜ク醋ヲ用テコレニ貼スヘキナリ。按ニスル  
 所ノ風氣腫ナモシテ世ナクコク有ラト推スナ  
 即チ其形状漫腫ニシテ頭ナクコク有ラト推ス  
 ハ他ニ移リ。風ヲ放ニテ再ヒコレヲ切案ノ如ク  
 起ルコト。風ヲ放ニテ再ヒコレヲ切案ノ如ク腫  
 ル如シ。外科ニ創テ流注シテ水鏡コレヲ法  
 療スル。觀ルニ亦其創ヲ淨除滌刷スルヲ法  
 ト用テ。乳中凝滯痰穢ヲ用テ。外除滌刷スル  
 施ス。又以テ。常トス。其ヨリ法ニ是ノ章然  
 所トシ。合テ。其原西街ヨリ傳ルニ是ノ章然  
 以テ。知ル。其原西街ヨリ傳ルニ是ノ章然  
 へキテ。ノ知ル。其原西街ヨリ傳ルニ是ノ章然

右第五十一章。風氣腫ノ証治ヲ論ス

爰ニ驚異スヘキカ如キ一證アリ。安ニ時有テコ  
 レヲ目撃セリ。少選ノ間ニシテ風ヲ上下ヨリ發  
 泄スルコト其量ヲ幾何スルコト能ハス。此證多  
 クハ果安食之。饗ノ饌常ニ之ヲ用ス。若クハ粉麪ノ  
 類ニテ造リタル者ヲ食シタル後ニシテコレヲ  
 得ル者ナリ。只其コレヲ異ナリトスル者ハ。從來  
 事物ヲ經試シテコレヲ覈實ニスルコト無ニ出  
 ヲ。何トナレバ。嘗試ニ其如何ナル食饌ヲ用タル  
 時。斯ク異証ヲ發スルソト云フヲ蹤蹟考察スル  
 時ハ。啻ニ其事ノ解シ易キノミナラス。治療ノ術  
 ト雖モ。亦コレニ因テ。其從事スヘキ所ヲ得テ。一

挙ニシテ両ナカラ全キヲ得ヘキナリ。○第一  
 ニ是明ニ知ル此果安ナラヒニ粉麩類ニテ製造  
 シタル食餌ヲ喫シ津唾ヲ費シテ是ヲ嚙嚥シ夕  
 ル者ニ至テハ其烹釀煎熬スルコト甚疾速ニシ  
 テ以テ許多ノ風氣ヲ生スルコトヲ是故ニ若シ  
 右ノ類ノ食餌ノ胃中ニ入テ然シテ此ノ風氣ヲ  
 發スルノ証ニ遇ハク輒チ知ルヘシ是其烹釀煎  
 熬ヨリシテ然ルコトヲ若シ其肉ニテ製造シ夕  
 ル食物ヲ喫シテ後コノ証ヲ發スルハ則チ知ル  
 是其腐敗變壞ヨリシテ發動スルヲ○壯健無  
 病ノ人ニ於ハ右ノ風氣ヲ發シ來ルノ患ナキ者

ナリ是其胃ト諸腸トノ元化全クシテ健運シ其  
 烹釀煎熬スルノ動及ヒ腐敗變壞スルノ挙ヲ保  
 障スルカ故ナリ。○コノ處ヨリ思索セハ則チ知  
 ヘシ此証ノ發スル是其人胃ト諸腸トノ元化素  
 ヲリ虚弱ナルニ因テ疑立シテ恒ニ其烹釀煎熬  
 スルノ挙ト腐敗變壞スルノ動トヲ保障スルコ  
 ト能ハザルノ致ス所ナルコト。○是故ニ若シ人  
 コノ患ニ嬰リコノ証ヲ發シ直ニ風氣ヲ發洩ス  
 ルコトアリ或ハ腹中風氣アルニ因テ膨脹ヲ現  
 シナトスルハ須ク燒酒少許ヲ用テ橙皮モシク  
 ハ香櫞皮ヲ浸シ又ハ自餘香料藥品ヲ以テコレ

ニ浸シ。是ニ與ヘ服セシムレハ。咽ニ下テ即チ風  
 氣ノ迸散消込スルコトヲ知ルナリ。是ヲ以テコ  
 レヲ破氣驅風ノ劑ト名ルナリ。此ノ藥無テ胃ト  
 諸腸トノ運化ヲ強壯ニシ。且以テ豫メ夫ノ烹釀  
 煎熬ニ進ムノ動ヲ防障スルナリ。○然トモ唯其  
 証ノ腐敗變壞ノ舉。胃中ニ在ルアルニ因テ起ル  
 者ニ至テハ。香櫞汁ニ列應イニセ設酒ヲ合シタルヲ服  
 シテ。其風氣ヲ靜止スヘキナリ。○此論ヲ讀ム者  
 宜ク胃ト諸腸トニ將出シ來ル所ノ風氣ヲ以テ。  
 驟シテ皆夫ノ烹釀煎熬ノ舉。若クハ腐敗變壞ノ  
 動ヨリシテ發スルコト。必ス嘗試スル所ノ諸件

ノ如シト思フコト勿ルヘシ。何トナレハ。曾テ食  
 物ニヨラスシテ大ニ幾多ノ風氣ヲ發洩スルノ  
 証。ナラ多ク有レハナリ。○其食物ニヨラスシテ  
 發スルノ証ハ。是レ胃ヲヨヒ諸腸ノ。自然ノ恒性  
 ニ逆スルノ運動ヲ為スカ致ス所ナリト思ヘシ。  
 ○遍ク生人ノ身體ニ就テ熟ワラコレヲ考ルニ。直ニ  
 是レ生活ノ元運。自然ニ順フ者ハ風氣ヲ消化シ。  
 生活ノ元運自然ニ逆フ者ハ風氣ヲ發現スルニ  
 外ナラサルノニ。其全論ノ如キハ。茲ニ畧説スル  
 ソ能ク悉ス所ニ非スト知ヘシ。○此患ニ嬰兒者  
 ハ。毎ニ其胃及ヒ諸腸ノ元運ノ自然ニ反スル人

二於テスルナリ。夕トヘハ婦人ノ憂思シテ以テ  
 子藏衝逆ノ患。所謂母兒私百尔ノ証多現シ。夫ヨ  
 リシテ胃及ヒ諸腸同ク其心意ヲ攪擾スルノ憂  
 ニ從テ。許多ノ風氣ヲ生シテ。コレヲ發洩スルカ  
 如シ。以テ見ツヘキノ。母ノ私私的百尔ノ葛心  
 婦人ノ疾ニ傷テ。其証候至テ多ク。其起原亦  
 足ル。第一ハ是レ誘子ノ急牽掣スルハ。原  
 ス。然レ憂愁ニ悲泣ニ因リ。下部寒冷。情  
 ニ。或因ハ飲食ニ反スル。或因ハ下部寒冷。情  
 リ。或ハ飲愁ニ悲泣ニ因リ。下部寒冷。情  
 ハ。香臭ニ滲漬スル。或因ハ下部寒冷。情  
 又ハ子宮ノ氣若小。腹拘急。不痛。頭眩。相  
 ル。ナリ。其証多ク。ハ小。腹拘急。不痛。頭眩。相  
 少。以テ息如ク。目動。播。胸腹不利。諸筋相  
 ヲ見ル。状ノ息如ク。目動。播。胸腹不利。諸筋相

雷鳴ヲ作シ。奔豚上。或ハ泣。或ハ吐。常ナラサ  
 ン。發洩シ。或ハ喜。或ハ泣。或ハ吐。常ナラサ  
 ヲ。状ヲ為ス。婦人ノ憂思。今紫スル。即チ今世  
 ニ。多ク有ル所。婦人ノ憂思。今紫スル。即チ今世  
 ト。稱スル者。即チ是ナリ。下。第百十八。章ニ。畧  
 病。証ヲ載ス。併考ヘシ。夕。東。西。病。考。二。詳。二。畧。其。○  
 法。必。ス。箇。ノ。茶。劑。ニ。加。ル。ニ。催。睡。茶。ヲ。以。テ。是。ニ  
 與。レ。ハ。其。自。然。ニ。反。ス。ル。ノ。運。動。頼。テ。以。テ。静。治。ス  
 ル。ナリ。即チ阿芙蓉劑ナル者。是ナリ。此是ノ証ニ  
 臨テ。破氣驅風ノ一大良藥ナリト知ヘシ。○右等  
 ノ証ニ遇ハ。須ク次ニ出ス所ノ方ヲ用ヘシ。此  
 最モ闕ヘカラサルノ妙劑ナリ  
 破氣驅風劑方  
 薄荷水  
 六十四錢



底野迦 一錢五分

没藥 二錢 蜜去ル

橙皮油 五滴

牽達扭護律規需護 十五滴 製法第廿四章 見第廿九章

急成礪砂精 一錢 製法第廿四章 見第廿九章

白罌粟舍利別 八錢 製法第廿五章 見第卅三章

右件合シテ調勻ス。○先ツ橙皮油ヲ把テ砂糖

少許ヲ以テコレニ和糅スヘシ。然サレハ衆藥

ヲ合スルニ臨テ調勻セス。劑ヲ成ヘカラサル

カ為ナリ○若シ没藥丁蜜去ルナキ時ハ直ニ

没藥末ヲ代用シテ可ナリ。其時ハ二錢ヲ減シ

テ一錢ヲ用ヘシ。○若シ夫ノコレニ温暖ノ功

ヲ兼施シコトヲ要セハ宜ク消疝露二錢ヲ用

テコレニ合スヘシ。消疝露 原名 烈壹私 栗 黧 斯 伊 蒸 露 壺 吉 尼 必

製シタル藥劑ノ精液ニシテ。疝氣積痛ヲ主シ。○

治ス。故ニ名ク製法醫學寶函ニ出ヅ。考ヘシ。

右ノ劑。一時ヲ四分スルノ間ヲ隔テコレヲ

一匙ツ、飲服スヘシ。或ハ症ニ隨テ其間ヲ疎

濶ニシテ是ヲ用ルモ亦可ナリ。但其是ヲ服ス

ルノ期限。病差ルヲ以テ度トシテ止ム。

右第五十二章。風氣ヲ發洩スルノ証治ヲ論

予醫學ニ從事シテ衆理ヲ研究スト雖モ其小礫

零碎ノ事ニ至テハ。未夕曾テ毎件其師説ヲ叩問  
シ。逐次其解説ヲ承ルコトアラス。然レトモ凡百  
ノ理義。大率類ニ觸テ其原ニ逢サルコトナシ。即  
コノ條ニ論スル腹中聲ヲ作スノ一証ノ如キ。亦  
其類ナリ。○大凡是ノ腸鳴等ノ証。以テ風氣運動  
スルノ致ス所トス。殊ニ知ラス其風氣ノ密閉セ  
ル所ニ送ラレテ其中ニ充塞スルコト。胃及ヒ諸  
腸ノ中ニ在カ如キ。毫モ其力ノ以テ自動ヲ發ス  
ヘキナシト云コトヲ。○何トナレハ屍ニ就テ試  
ニ胃ト諸腸トノ中ニ風氣ヲ充テ、以テコレヲ  
驗シテ知ヘシ。其雷鳴ヲ作スヲ聞テ有ヤ。且其運

動スルヲ見ルテ有ヤ。其雷鳴ヲ作シ運動ヲ為ス  
ハ。此皆生活ノ元運ノ為ス歟ニシテ。曾テ風氣ノ  
自ラ能スル所ニ非スト知ヘシ。○是ヲ以テ胃及  
ヒ諸腸ノ運動自然ニ逆スル者。即チ其中ニ穿入  
タル所ノ風氣ヲ推盪スルヲ為ナリ。其一様ナ  
ラス洞開ナラスニテ。迂曲詰盤セル屈絳襍積ノ  
中ヲ回轉シテ。是ヲ傳輸スルニ因テ。夫ノ雷鳴蛙  
聲アルコトヲ致スナリ。○右ノ風氣ヲ將出シ來  
ル所以ノ者モ。亦其胃及ヒ諸腸ノ運動。自然ニ逆  
スル者ノ致ス所ナリ。是ヲ以テ若シ其運動依然  
トシテ疑立結定シテ動力カサル時ハ。許多人風氣

ラ圍住鬱閉シテ。全然トシテ外泄セサラシムル  
 カ故ニ。人ヲシテ腹痛淹ク去サラシム。其腹痛及  
 ヒ胃痛。即チ疝ノ一種胃疝ト號スルノ証ニ於テ。  
胃痛ナラヒニ胃病ノ証候等。第百九十一  
 章及ヒ第二章百七章ニ見タリ。併考ヘシ。一時ニ  
 風氣ヲ發洩スルヲ得レハ其痛脫然トシテ大  
 ニ甘クモノナリ。此第一ハ。其胃及ヒ諸腸ノ織筋  
 細條。コレマテ牽縮寧急セルモノ斯ニ至テ自ラ  
 能ク寛縦スルコトヲ徵ス。第二ニハ。其自然ニ逆  
 スル運動ノ為ニ圍住鬱閉セラレテ梗塞セル所  
 ノ風氣ヲ。發遣洩除スルニ因テ。夫ニ牽率狹逼セ  
 ラレタルノ部始テ其連及坐累ヲ免レテ迺チ爾

ルコトヲ知ルナリ。○右ノ証亦前章ニ説ク所ノ  
 療法ノ如ク斯ニ從事スルトキハ。共ニ能ク治ス  
 ルナリ。○何ヲ以テ之ヲ言ハハ。若シ人只其自然  
 ニ及スル運動ヲノシ静治スレハ。夫ヨリシテハ  
 風氣自ラ發洩シ。痛自ラ息止シ惣體ノ風氣トモ  
 再ヒ諸藏ノ恒性運化ニ因テ。消化スルノ舊ニ復  
 スルコトヲ得ルナリ。○是ヲ以テ予夫ノ胃疝即チ  
所謂疝及ヒ腸疝ヲ痛以テ所在ト呼ヘ凡所ノ胃痛腸  
 痛ヲ療スルニ。常ニ風氣ヲ發洩スルコトヲ事ト  
 セス。又下利ノ劑ヲ用ヒスシテ治スルナリ。○然  
 トモ若シ其翁傑達安篤竭意度第十七章ヨリ起

リ。腸中ニ壞液ノ浸漬スルニ因テ。風氣ナラヒニ  
疝証即腸痛等ヲ云。第二章七百七章已下ヲ發スルノ  
徵ヲ察シ得ルコトアレハ。必ス先ツ其腐壞ノ毒  
毒ノ字注第六ヲ滌除スルヲ以テ務トス。便次ニ  
出ス所ノ方ヲ用ルナリ。

疝ヲ治スル下劑方

旃那葉 二錢

葛縷子

撒兒葛

橙皮

右件合シテ水四十錢ヲ用テ之ヲ浸シ。漉過シ。

代用說第十六章ニ注ス。案スルニ  
葛縷子 菜舖真ノ防風ト云者即是ナリ  
撒兒葛 恒爾蟄吉安及立加  
橙皮 各一錢

白罌粟舍利別 八錢

右一味ヲ加テ調勻シ。頓ニ之ヲ温服ス。劑ヲ好

私黠斯上名ク。

予毎々方中ニ列載スル所ノ白罌粟舍利別ナル

モノ。讀者ヲシテ自ラ製シテ其宜トスル所ノ者

ヲ使用セシメシコトヲ要スル力為ニ。爰ニ其製

法ヲ記シテ以テ附ス。世ニ用ル尋常ノ製ヨリハ

甚夕簡ニシテ精ナリ。

白罌粟苞二十顆ヲ取り。切テ小片ト成シ。撰揀

淨刷シテ莖ト子トヲ去リ水中ニ着テ柔漬ス

ルコト一宿ニシテ。次日之ヲ煮テ其脆熟スル



痛ヲ為ス所ノ者果シテ是レ風氣ノ致ス所ナリ  
ト云安徴アルコトナシ。夫レ右ノ痛ヲ為ス所ノ  
者ハ他ニアラス。只是酷厲液ナル者游歴走注ス  
ルノ徴ナルノミ。然レトモ世人舊習漸積シテ。其  
耳目ヲ錮スルコト久シケレハ。先入ニ執迷シテ。  
一旦ニ其盲ヲ擊發スルコト能ハス。舊染ヲ滌除  
シテ新理ニ冰釋スルコトヲ得ス。迺予以為ク其  
液何ヲ以カ能ク流移スルコト斯ノ如ク其レ疾  
速ナルコトヲ得ント。此彼ノ論者ノ執ル所ニシ  
テ。コレヲ喻サシムルコト。最一大蹇難ノ事ト謂  
ヘシ。ソレ神經ノ官能タル。一ニ寒熱痛痒凡百ノ

感觸ヲ智覺スルヲ以テ專務トス。故ニ神經室互  
ニ相錯綜糾紛シテ彼此交通シ。聯絡シテ窮ラス。  
若シ神經ノ中間ニ事アルトキハ。其神經ノ至リ  
終ル處マテハ。與テ其感觸ヲ共ニスルナリ。此等  
ノ義。彼ノ疑惑ノ輩ヲシテ茲ニ領解スルコト有  
レノハ。復其痛ノ速ニ處ヲ移スコトヲ大ニ疑怪  
セハルヘキナリ。○何トナレハ。人若シ神經液ノ  
中ニ酷厲液アルコト。既ニ第四十一章ニ講明ス  
ルカ如キニ會シニ。假令彼移動スルコト微ナル  
モ。尚能ク此ノ神經線ヨリ彼ノ近隣シテ互ニ相  
交錯スル所ノ神經ニ至リ。其部ヲ異ニスル者ニ

及テ終ル時ハ。則チ明ケシ其痛ヲ發スルニ至テ  
ハ。能ク速ニ移動常ナク遠キニ及フヘキコト。○  
茲ニ所謂風氣ノ証ハ。是レ聖<sup>シ</sup>京<sup>キョウ</sup>健<sup>ケン</sup>及ヒ伊<sup>イ</sup>屈<sup>クツ</sup>多<sup>タ</sup>ノ  
酷<sup>ク</sup>屬<sup>リ</sup>液<sup>リ</sup>ヨリシテ將來ルノ致ス所ナルカ故ニ。療  
法既ニ各門ニ於テ講明シタレハ。茲ニ援引スル  
コトヲ費サ、ルノコト。

右第五十四章。風氣游歷ノ証治ヲ論ス  
人<sup>ヤ</sup>動<sup>カ</sup>スレハ輒チ風氣ノ發動スルコトヲ患ルノ  
性ナル者元ヨリ多シ。其人苟モ屋外敞豁ノ地ニ  
居リ。アルヒハ道途ニ往來シ。アルヒハ風氣ノ中  
ニ立ナトシテ。其寒涼ヲ覺ル時ハ。忽チ風氣身體

ニ充塞スルコトヲ為シ。帝ニ腹中ニ所謂疝証ニ  
百<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>章<sup>ニ</sup>疝<sup>ノ</sup>ノ風<sup>ノ</sup>氣<sup>ニ</sup>ニ因<sup>ル</sup>ヲ發スルノミナラ  
ノ証治ヲ論セリ。併考ヘシ。○ハニ於テ彼レ一箇ノ見  
クナルコトヲ覺フ。○ハニ於テ彼レ一箇ノ見  
解ヲ發シテ以為ク。是レ外來ノ風寒。コノ身體ニ  
襲入内潜シテ。斯ク游歷發動シ。遍ク身體ニ及フ  
ト。豫メ為ニ賊風入ヘカラサルノ備ヲ為シ。風氣  
ノ絲リ來ル所ヲ屏障シ。身ニハ則チ巾帽ヲ蒙被  
シ。或ハ巾モテ其口ヲ蔽フニイタル。以為ク風氣  
ヲシテ侵入スルコトヲ得サラシム。○此  
皆不學無術ニシテ其原由ヲ知サルノ致ス所ナ

五十五

リ。何トナレハ其體中ニ覺ル所ノ風氣ハ。元來是  
 レ外來ノ風氣ニ非ス。亦呼吸ヨリシテ吸入タル  
 ニモ非ス。亦吞下シタルニモ非ス。亦皮膚ヨリシ  
 テ鑽入シタルニ非ス。只是寒涼ナル外氣。人身ヨ  
 リ暗ニ蒸發スルノ一物ヲ閉塞スルカ故ニ。體中  
 ニ在テ無用ナル老廢ノ剩液。洩除スルコトヲ得  
 スシテ鬱蓄シ。愛シテ酷厲ヲ成ス者。以テ此ノ証  
 ノ原由トナルナリ。○人身ヨリ日常覺ヘスシテ  
 洩除スル所ノ剩液等。第一ニ先ツ神經液ニ宿リ。  
 以テ腸間膜ノ神經ニ浸滲スルトキハ。其所在ス  
 ナハチ夫ノ疝証及ヒ自然ニ逆スル運動ヲ作シ。

其諸腸へ風氣ヲ將出シ來ルナリ。此ノ証ニシテ  
 神經コレヲ四支ニ轉輸スルニ至テハ。則チ夫ノ  
 拂里健<sup>ゴ</sup>埴<sup>ダ</sup>伊<sup>イ</sup>屈<sup>グ</sup>多<sup>ト</sup>ヲ為スナリ。即チ壘節痛風。第  
 四十五章ニ出ツ。○  
 何ノ方法ヲ用テ此ノ諸氣ヲ治スルヤ。是レ元ヨ  
 リ明ナリ。其液ヲ再ヒ皮表ニ發遣シ。從テコレヲ  
 外洩スルニ外ナラサルノミ。治法既ニ上ノ第四  
 十四章ニ擧ク。

右第五十五章。風氣冒寒ヨリ發スルノ証治  
 ヲ論ス



黄疽篇第八

夫レ膽腑ノ中ニ胆汁ヲ藏メ盛ルコト。元是レ肝臟ノ中ヨリシテ造リ成シテ送り納ル所ナリ。膽受テコレヲ蓄ヘ。迺チ更ニ胆汁管和蘭ニ提ト云。膽腑ノ中ヨリ胆汁ヲ出シテ。尾而利特兒ト云。指腸ヘ送ルノ膜管ヲ名ク。ヨリコレヲ出シ。胃ノ下口ニ密通セル薄腸ノ始ナル十二指腸ニ輸シ灌クナリ。十一、二、指腸ハ其長廿十二指。潤テ助内ヨリ左腎ニ向テ下ル膽汁及ヒ此皆天造自然ノ常ニシテ。飲食ヲ消磨化熟スル力為ニシテ然ル所ノ者ナリ。屈屈兒武武思相相和而而シテ水水穀シシ化ルル。○膽汁ノ平人ニ於ル其色常

ニ黄ナリ。其腐敗スルニ及テハ。其色變シテ常ナラス假令ハ灰白ヲ為シ。又ハ蒼緑ヲ為シ若クハ鉛色若クハ黧黑種々ノ異色ヲ現スルナリ。○其胆汁衰スルト衰セサルトヲ問ハス。何レニモ其循行ノ常ヲ保スルコト能ハスニテ。循行ノ常ト管ヨリ輸出シテ十二却テコレヲ血脉ノ方ヘ濫流指腸ニ輸スヲ云。セシムル時ハ。則チ一身ノ血ト混淆ス。一身ノ血ト混淆スル時ハ。其胆汁自家ノ黄色ヲ外皮膚ニ透見シ。上ハ諸ヲ白睛ニ發シ。下ハ諸ヲ小便ニ瀉シ。悉ク黄色ヲ為スナリ。其黄汁ノ染漬スル所。紙若クハ布帛輒チ黄色ヲ成コト。濯漑ノ能ク澡雪

○内科要  
卷之四  
五十六

スル所ニアラス。是時ニ當テハ。其大便元ト黄色ナルヘキ者。必ス變シテ白色ヲ成シ或ハ淡黒ヲ成スコト。大抵爾リトス。此何ノ故ソトナレハ。他ナシ。是レ常ニ薄腸ニ輸シテ大便ヲ染ル所ノ膽汁。常ノ如ク輸シ來ラスシテ。上諸ヲ血脉ニ濫スルカ故ニ。大便染ル所ナキニ因テナリ。○コレニ因テ身體黄色ヲ皮表ニ發スルノ証有ラテ致スコレヲ名テ黄疸ト云ナリ。羅<sup>ウ</sup>甸ニコレヲ壹<sup>イ</sup>孤<sup>ク</sup>的<sup>テ</sup>祿<sup>ロ</sup>私<sup>ス</sup>ト云。但其膽汁腐敗シテ適ニ疾ヲ發スルニ至テハ。則チ其本証トノ差別自ラ知ヘキナリ。二第<sup>ニ</sup>節ノ義<sup>ヲ</sup>。

右第五十六章。黄疸ノ大較ヲ論ス。摠シテコノ膽汁ノ十二指腸へ循行スルノ道路ヲ闕遏スルノ原由ニテ。膽汁常ノ如ク前行スルコト能ハスシテ。已コトヲ得ス逆流シテ血脉ニ濫入スルコトアル。便チ是レ黄疸ノ繇ヲ發スル所ナリ。○其膽汁ヲ障礙スル所ノ原由。若シ一事一物ニ係テ。單ニシテ雜ラス。以テ其疾ヲ發スルニ途トキバ。治法モ亦各自其原由ヲ除クノ一術ヲノミ施シテモ。亦以テ其治ヲ為コトヲ得ヘシ。只是其原由ノ一ニシテ足サル。一事一物ノ能ク從事スルコトヲ得ル所ニ非ス。夾併スル所アリ

テ繁雜ナルハ。診察ノ法ヨリ治療ノ術ニ及マテ。亦隨テ彼此相ト兼子數件互ニ併テ。コレニ應セサルコトヲ得ス。○予其須ク知ヘキ較著ナル數証ヲ挙ケ。并ニ其某方ヲ著シテ。コレヲ治療ノ條ニ附セントス。

右第五十七章。黃疸ノ病因ヲ論ス。

黃疸ヲ病ム者アラシ。或ハ曾經<sup>カクテ</sup>屢<sup>レ</sup>白<sup>ク</sup>レヲ患ヒ。或ハ始テ是ノ証ニ嬰リ。程ナク治ヲ俟スシテ自ラ癒ルハ。種々ノ色状ヲ為セル穢物ヲ下利スル者ナリ。常ニ多クハ白色ノ物。淡黒ノ物。及ヒ粘稠ナルノ物ニシテ。胃膈間頻々ニ苦煩シ。而シテ全體

ニ彌テ黃ヲ發スルナリ。是レ其原由。一小石有テ膽汁管ノ中ニ充塞シ。其十二指腸へ達スルノ道路ヲ絶スルノ致ス所ナリト察スヘシ。然レトモ其小石。時有テ自ラ其要塞ノ處ヲ閃<sup>ハッ</sup>開シテ他所ニ移リナドスルコトアル時ハ。便<sup>ハッ</sup>其膽汁再ヒ其常ニ復シテ循行スルコトヲ得ルカ故ニ。其病漸々ニ癒ルナリ。○右ノ如キノ証。死後コレヲ解剖シテ觀スルコト有ニ。毎ニ其膽腑及ヒ膽汁管ノ中ニ於テ。其小石ヲ得タルコト有リ。○若シコノ証ヲ患ルノ人。其大便ヨリシテ小石ヲ泄利スルコトアリテ。コレヲ火中ニ投スルニ輒チ燒ク。

或ハ一箇ノ黄色ナル粘稠液ヲ瀉出スルハ。是レ其黄疽ノ甘キ癒ルノ徴ナリト知ヘシ。○是故ニ。此一種ノ黄疽ヲ治スルノ法方。一ニ其小石ヲ解泐銷燥シテ。其塗塊ヲ大便ヨリシテ瀉出スルノ術ヲ為ヘキナリ。

方

ガ  
ル  
バ  
ヌ  
ム  
尾  
尔  
拔  
奴  
謨

勿  
擲  
祭  
亞  
石  
鯨

酒  
石  
鹽

大  
黄  
末

越  
栗  
失  
尔  
剥  
禄  
布  
利  
恒  
窒  
私  
扒  
刺  
設  
兒  
失

宜適

成菜ノ名ナリ。盧會没菜泊夫藍ニテ製ス。詳ニ医学寶函ニ見タリ。右件合シテ調勻シ。每一錢十五丸ト為シ。日ニ三四次コレヲ四九ツ、服ス。○患人ヲシテ唯菜蔬ノミヲ食セシメ。モ口く油膩粘稠ノ物ヲ禁スヘシ。

右第五十八章。發黄ノ膽汁管中ニ小石ヲ結成スルニ因ルノ証治ヲ論ス。

夫ノ蘇對布的列金偈ノ運動ニ嬰タ人。及ヒ子藏衝逆ノ証ヲ患ル者。蘇對布的列金偈ハ第百十章ノ註ニ出ツ。子藏衝逆ノ証ハ。原母見私百又併考ヘシ。其意思ヲ勞苦スルノ運動ニ因テ攪

亂騷擾スルコト大甚ナル時ハ。毎ニ善ク此ノ黄  
疸ノ証ト變スルコト。至テ速ナル者ナリ。此其膽  
汁管ノ蘇對布<sup>ス</sup>的<sup>テ</sup>列<sup>ラ</sup>金<sup>キ</sup>屈<sup>グ</sup>ノ運動ニ牽掣<sup>ス</sup>急<sup>セ</sup>ラ  
ル、ニ因テ。膽汁常道ニ循テ前行スルコト能ハ  
ス。終ニ逆流シテ血脉ニ混シ入ルノ致ス所ナリ。  
○ソノ牽掣<sup>ス</sup>急<sup>シ</sup>テ箱<sup>サ</sup>控<sup>セ</sup>ラル、ノ間ハ。黄疽  
モ亦治セサルナリ。只其箱<sup>サ</sup>控<sup>ス</sup>ル<sup>ル</sup>ト縱弛<sup>ス</sup>スル  
トキハ。則テ漸々ニ其色薄<sup>ラ</sup>キテ治スルニ至ル  
ナリ。此其彰<sup>ク</sup>較<sup>ク</sup>ナル者ハ即テ膽汁ノ混淆スル所  
ノ血ヲ再ヒ肝臟ニ於テ悉クコレヲ濾過<sup>シ</sup>脩<sup>シ</sup>製<sup>シ</sup>  
テ。然後身體ノ血。混淆セシ所ノ膽汁ト始テ以テ

今利スルコトヲ得テ。純紅ノ本色ニ復スルカ故  
ナリ。○是ニ於テ廼<sup>チ</sup>知<sup>ル</sup>ヘシ其往來アルノ發  
黄ニ。衆論ノ如キ膽汁管中小石アルノ明<sup>ク</sup>靨<sup>ナル</sup>  
モノ無キ者ハ。是カ為ナルコトヲ。○是ニ於テ又  
廼<sup>チ</sup>知<sup>ル</sup>ヘシ是ノ証ノ如キ。尋常記載スル所ノ  
黄疽ヲ治スルノ諸方法ヲ多ク擬議スト雖モ。其  
病原ニ於テ實ニ没交渉ナルコトヲ。○是ニ於テ  
又廼<sup>チ</sup>知<sup>ル</sup>ヘシ此証ノ發黄ヲ治スルニハ。第五  
十二章ニ舉ル所ノ。蘇對布<sup>ス</sup>的<sup>テ</sup>列<sup>ラ</sup>金<sup>キ</sup>屈<sup>グ</sup>ヲ靜和スル  
ノ方法ニ因テ必ス治スルコトヲ。○何トナレハ  
其牽掣<sup>ス</sup>急<sup>ノ</sup>上冲セル者自ラ縱弛和解スレハ。

夫ヨリシテ膽汁其常道ニ循テ行キ。而シテ肝臟  
モ將ニ從テ再ヒ復能ク是ノ膽汁ヲ血中ヨリシ  
テ分利セントスルカ故ナリ。○見ヨ其面黄ヲ減  
シ。小便モ亦黄ヲ減スルコトヲ。此其徵ナリ。○是  
故ニ。入其小水黄色ナルヲ以テ。黄疸ノ治スル徵  
ナリト思フコト勿レ。唯是黄疸鮮輕ニ非ルノ一  
徵ナリト知ヘキナリ。

右第五十九章。發黄ノ蘇對布的列金匱ニ因  
ルノ証治ヲ論ス。

予屢見ルニ人強ク嘔吐シテノ後。忽爾トシテ此  
ノ黄ヲ發スルモノ多シ。予想フニ斯ノ証ノ若キ

ハ。是全ク嘔吐ニ因テ發スルナリ。蓋シ膽腑中ニ  
於テ膽汁盈虚スルノ時アリ。膽汁盈虚ノ事。第百  
考ヘ適其満盈ノ時ヲ以テ嘔吐ニ値フコト有ト  
キハ。其嘔吐スルノ際ハ。腹筋強ク相ヒ緊牽絞急  
スルカ故ニ。第一ニ箇ノ十二指腸モ夫ニ連テ相  
ヒ緊牽絞急シテ。膽汁ヲ納ルノ道路コレカ為  
ニ絶スルカ上ニ。元來膽腑ヨリ膽汁ヲ十二指腸  
へ輸スコト。是ヲ一頓ニ多ク轉瀉スルコト能ハ  
ス。膽汁管ヲ經テ稍々ニコレヲ送ルモノナレハ  
是ニ加ルニ其道ノ絶スルヲ以テ。膽汁満盈セ  
ル者前道ヲ阻セラレ。其上嘔吐ノ為ニ絞急セラ

其勢逆行シテ肝臟中ノ血脉ノ支別ニ高フコト。是レ膽汁管ノ常ニシテ。是ニ於テ膽汁常行ノ道ニ反シテ血中ニ混淆シ。以テ此ノ黄疸ヲ發スルコトヲ致スナリ。然レ此証ニ至テハ。暫ノ間茶セスシテ之ヲ熬得スル時ハ。自ラ癒ル者ナリ。是其一週遭其血ヲ肝臟ニテ残ラヌ瀝過シ了レハ。膽汁ト鮮血ト始テ相分利シテ。其常ニ復スルカ故ナリ。右ノ處ニ用ルノ茶劑ハ。唯其自然ヲ助ルノ茶ニシテ。通用記載スル所ノ方ニテモ可ナル故。爰ニ特ニ緊要トスル所ハ。嘔吐ノ大過ナルヲ治スヘキナリ。則其由テ黄疸ニ寢スルコトヲ

講明シテ。コレヲ未病ニ防クヲコソ。宜キ治法トハ謂フベキ。

右第六十章。發黃ノ嘔吐ニ因ルノ証治ヲ論

夫レ熱病即哥爾都ナリ。第一卷ニ於テ發黃ノ証ヲ將來ルノ一事。予論者ノ説ヲ歷察スルニ。古説モ新説モ。其診察ノ法治療ノ術。大ニ錯亂紛糾ヲ致セリ。是ヲ以テ其証載スル所ノ茶方ト雖モ。互ニ異同アリテ適從スヘキナキコトヲ致ス。○悉ク是ヲ數ヘハ此ノ畧冊子ノ能ク包括スル所ニ非ル。浩漭ニ涉リ。且學者ニ非スシテハ其義モ亦

卷之四 六十一

解シ易カラスシテ。却テ疑惑ヲ惹<sup>ヒ</sup>カ為ニ。予將ニ  
其一件一物ニシテ雜糅セザル者。唯ニ條ヲ挙テ  
コレヲ示ントス。○人コノ純ラナル<sup>七</sup> 誓雷熱ヲ患  
ルノ運動ヲ為コト。第四日又ハ第七日ニシテ是  
ヲ得ル者ナリ。其自然ニ及スル運動。膽汁管ニ及  
フ時ハ。其前行ヲ阻隔スルカ故ニ。遂ニ膽汁ヲシ  
テ膽腑ノ中ニ聚蓄セシム聚蓄シテ輸ス所ナク。  
遂ニ肝ノ膽汁ヲ令利シ送ルノ管ヨリ逆流シテ  
血中ニ向ヒ入り。以テ發黃ノ証ヲ見スナリ。若シ  
其運動ヲ將來ルコト。熱病ノ毒<sup>第六章及</sup> 併考ヘシ。百

ヲ製造化醸スルニ出ルハ。即チ其黃ヲ發スルコ  
ト一箇ノ善徵ニシテ。夫ヨリシテ其熱病ノ毒モ  
亦泄レ。熱モ亦減スルニ至ルヘシ。然凡其熱病ニ  
因テ右ノ運動ヲ發スルコト。病ノ險惡ニ趣クニ  
出ルハ。速ニハヤカノ脱レ熱ノ增益スルコトノ  
現レ來ルニ途ナリ。斯ノ如キ發黃ニ至テハ。算シ  
得テ惡候ノ中ニ屬スルナリ。○右ノ如ク熱病ニ  
添來ル發黃ハ。復其<sup>五</sup> 方ヲ變シモテ來ルコトナ  
シ。其証ニ臨テモ唯是ヲ熱病ノ治法ニ於テ擬議  
スレハ。則チ能事畢ル。○夫ノ發黃ノ熱病ニ生シ  
テ。第一ハ其熱ノ運動ヲ作スコト肝臟ニ落チテ。

内科雜論 卷之四 三十三



肝臟為二炊熱ヲ發シ。或ハ又肝ノ翁篤私麥金屈  
 病名ナリ。脾腎膈膜及ヒ肝肺膜等ニ生ス。外生ス  
 ル者ハ肝脾手足頭面及ヒ肝肺膜等ニ生ス。其証候  
 外表ニ發スル者ハ頭痛熱シテ副常シ寒熱ヲ發ス。渴  
 ハ亦熱シテ凝滞シテ運行常シ寒熱ヲ發ス。渴ヲ得  
 ヲ其部血前痛テ凝滞シテ運行常シ寒熱ヲ發ス。渴ヲ  
 各種ノ名謂見夕リ。ニ發シタルニ違ハ。宜ク  
 醫學寶函ニ見夕リ。ニ發シタルニ違ハ。宜ク  
 刺絡術ヲ施シ。且第十二章ニ舉ル所ノ清涼ナル  
 下劑ヲ用テ。其大過ナル運動ヲ静和スルコトヲ  
 要スヘシ。○右ノ如クニシテ思マ、ニ行夕ラハ  
 其上ハ第十二章ニ舉ル所ノ清涼飲ヲ服セシム  
 へシ。即チ其黃自ラ消除スルナリ。  
 右第六十一章。發黃ノ熱病ニ因ルノ証治ヲ

論ス。

其發黃ノ中ニ就テ最モ治ヲ施シ難キ險症ノ一  
 種ト云ヘキハ。即チ肝ノ頑痺鬱結シテ閉塞シ夕  
 ルノ時ニシテ。是ト齊夕膽汁ノ腸ニ通スル道路  
 ヲ障礙スルヨリ發シ來ル是ナリ。何トナレハ始  
 先ツ其閉塞ヲ解緩疏散シ。又從テ而シテ膽汁ノ  
 通道ヲシテ自由ニ循行スルコトヲ得セシムル  
 ニ非ルヨリハ。治スルコト能ハサルナリ。此事能  
 シ易カラサル所ナリ。○右ノ因ニテ發スル黃疸  
 ヲ診察スルノ法。其上腹ヲ心下ヨリ臍上ニ至ルマ  
 昆詢ニ里コトヲ喜利。短脇肋ノ下。痞滿脹起シテ堅硬

ノ形ヲ為コト。主トシテ右脇ニ偏ニシテ。肝ノ位  
 スル所ニ於テスルヲ以テ徵候トス。○人はノ肝  
 臟閉塞ノ証。悉ク黃疸ヲ發スル者ナリト思フコ  
 ト勿レ。必シモ然ラザルナリ。其黃疸ヲ發スルハ。  
 唯此ト一齊ニ膽汁ノ通道ヲ阻隔シタルノ一証  
 ノミナリト知ヘシ。○其頑痺鬱結シテ閉塞スル  
 コトノ長ク稽留スル時ハ。膽汁モ亦久ク停滞ス  
 ルカ故ニ。其膽汁漸々ニ腐敗スルコト。諸ノ鬱止  
 シテ流動セサル汁液ノ渝壞スルカ如ク。漸々ニ  
 重難ナル証ノ黃疸トナリ。究竟ハ終ニ救ハレサ  
 ルニ至ルト知ヘシ。○是証ニ臨テ。其膽汁ヲ下ス

ノ計ヲ為シテ。百方スト雖モ以テ功ヲ收ルコト  
 ナシ徒ニカヲ費スノミ。コレヲ下シテ小便ニ黃  
 ヲ現スル故。治スルカ故ナルヘシト思フヘケレ  
 トモ。然ラス。其色濃厚ナルコト多キニ隨テ。其証  
 亦隨テ險惡ナルノミ。是レ腎ニ膽汁ヲ血中ヨリ  
 分利スルノ官能アルニ非スシテ。其能ク是ヲ為  
 スハ獨其肝臟ノミナルカ為ナリ。○是故ニ。宜ク  
 意ヲ用ヒ志ヲ致シテ。其肝ノ閉塞ヲ得効便宜ノ  
 方策ニ因テ解緩疏散スヘキナリ。其方法元來諸  
 般ノ不同有テ。以テ其諸因ノ一ナラサルニ應ス  
 ルカ故ニ。予茲ニ盡ク舉示スルコト能ハス。唯其

平常多ク有トコロ粘稠ナル寒液ヨリ發スル一  
件ヲ説テ夫ニ處スルノ菜劑ヲ載ス。自餘ノ方ニ  
至テハ。人宜ク他書ノ載ル所ニ從テ之ヲ搜索シ。  
以テ其肝ノ閉塞ニ係ルノイナキ各種ノ方法ヲ得  
ヘキナリ。

解結散鬱ノ罨劑方

蒲里沃尼亞根 八錢

茵蔯 二溢

接骨木花 一溢

胡盧巴仁末 十六錢

右件水酒各半ヲ用テ。煮テ罨布ガブ菜劑ノ名。稠厚  
糊ノ如シ。用テ

患處ニラ造リ。熱ニ乘シテ肝ノ部位ニ罨敷ス。  
更換スルコト日ニ再ヒ。先ツ的列並底那油少  
許ヲ用テ患處ヲ摩シ。然シテ後コレヲ施ス。

解結散鬱ノ散劑方

盧會 五分

沒菜 二錢

酒石鹽

乳香 各三分錢之一

右件合勻シテ散劑ト為シ。コレヲ十二二分ヲ  
其一分ヲ取テ是ヲ服スルコト日ニ兩三度。  
解結散鬱ノ膏菜方

謨失刺及尼蒲私膏

石鱈膏

右件膏菜合シテ調勻シ尋常ノ膏菜ヲ施スカ  
如ク是ヲ軟膏ニ攤開シ拔ル撒謨字露非亞尼  
ヲ取テ其上ニ遍滿セシメ以テ患處ニ貼ス○  
前ノ罨敷劑ヲ用ルコト能ハサル人須クコレ  
ヲ用ユヘシ良トス兩種ノ膏共ニ是ヲ得ルコ  
ト能ハサル時ハ其中一膏ヲ用ルモ亦得

右第六十二章發黃ノ肝ノ鬱塞ニ因ルノ証

更治ヲ論ス

西說内科撰要卷四終

西說内科撰要卷五

遠西

玉函涅斯垓我爾德兒著

日本

津山

宇田川玄隨晉

譯

鑿官法眼桂川甫周國瑞

閱

膽汁敗黑篇第九

膽汁敗黑病ノ名タル道ニ自ラ此病ノ原由ヲ状  
スル所ニシテ名ヲ聞テ斯ニ以テ全然ク是其膽  
汁ノ腐敗シテ一箇ノ較著タル黑色ニ變スルヨ  
リ發ル所ナルヲ知ルニ足ル其證必ス故ナク

レテ鬱憂悲悶スルヲ為シ。又且フ心志知覺常  
ノ如ク爽明ナラスシテ。事ニ臨テ疑惑迷罔スル  
ノ証相ヒ副テ離レサルナリ。此ヲ膽汁敗黒病ト  
名ルナリ。羅旬ニ默朗格利亞ト謂フ。今世一箇ノ  
通用ノ名ヲ字テ。喜剝昆垓兒ト呼フ。此其上腹ノ  
病ニ稱スルコトハ。自ラ其所ナレバ。尚未夕允當  
ナラストス。其義下文。○予意フニ此膽汁敗黒病  
ノ。多クハ短肋ノ軟骨下。所謂喜剝昆垓兒ノ傍  
邊ニ。其諸証候ヲ發スルヲ見テ斯ク名ク。又其膽  
汁敗黒病ノ。多クハ鬱憂悲悶ト。心思知覺ノ疑惑  
迷罔スルノ証ヲ將來ルカ故ニ。其心思情態ノ平

素ニ憂タル所ヲ標的トシテ。轉シテ只心思情態  
ノ平素ニ憂易タル証ノ名トシタルナリ。○其治  
療ノ法ニ於ル。大ニ混亂スルコト有コトヲ致ス  
ナリ。夫ハ如何ナル事ソト云ニ。予夫ノ世ニ所謂  
喜剝昆垓兒ノ証。心意ノ情態平素ノ性ト憂易タ  
ル者ニシテ。夫ニ少シモ膽汁敗黒ノ徵ナキノ証  
ヲ見ルコト毎度コレ有シコトナリ。斯ノ如キノ  
証ニ臨テコレヲ辨セス。察シテ定タル常例ノ膽  
汁敗黒ノ治法ヲ用ル時ハ。則チ憂シテ惡候ヲナ  
スナリ。○是故ニ予爰ニ世ニ所謂喜剝昆垓兒ノ  
中ニ就テ。其二様ノ殊異ナル者ヲ分別シテコレ

内科抄  
卷之三

ヲ記載セントス。○其二様ノ中イツレモ。法必ス  
心志荒散ノ証有テ。常ニ熱アルコト無ク。又且ツ  
第一ニ鬱憂悲悶ノ相ヒ副テ離レサルコト有ナ  
リ。

右第六十三章。膽汁敗黒病ノ大較ヲ論ス。

凡ソ人ノ能ク思惟知覺ヲ為テ。道理ヲ分別スル  
所以ノ者。皆ニ諸ヲ腦ノ官能ニ資ルノニ非ス。  
又其灌溉スル所ノ精氣ノ性ニ隨テ。意識モ亦為  
ニ憂スルコト有モノナリト知ヘシ。何トナレハ。  
夕トヘハ酒ヲ飲タル者。諸般ノ煎熬醱腊ナル飲  
モノヲ用タル者。或ハ自餘諸菜物ヲ服シタル者

ノ如シ。皆各其飲服喫用スル所ノ物ニ隨テ。其發  
スル所ノ徵驗ヲ異ニスルナリ。其能ク領解シ易  
キハ。飲酒シテ酩酊シタル者ト。平人トヲ見ヨ。其  
情態ヲ一ニスルカ。將夕其心思言動同カラサル  
モノアリヤ。其分別是尤モ知リ易キノ事。是ニテ  
推テ知ヘシ。○此ノ膽汁敗黒病モ。亦右ノ理ト其  
趣ヲ一ニスルナリ。何ヲ以テ之ヲ言ハハ。其敗黒  
セル膽汁ノ。腦ニ送ラレテ鬱憂悲悶ノ憂ヲ發シ。  
心意ヲ攪擾スルノ運動ヲ致スコト。此其自ラ浸  
漬スル所ノ液。其性淪衰シテ良善ナラサルカ致  
ス所ニ在ルコトヲ知ル。○然トモ此証ヲ發スル

コト。膏ニ是ノニニアラス。予其壞液ヨリシテ虚  
 弱ノ人ニ於テ。少モ胆汁敗黒ノ徴ナクシテ。亦能  
 ク此病ヲ發シ。尚且即チ治セスシテ。彌延スルコ  
 ト一年ニ及ヘル有テ見ル。○右ノ二種ノ病。若  
 シ一緊ニシテ治スヘキモノナラシメハ予豈箇  
 ノ絮絮ヲ厭ハスシテ。刻意苦心シテ是ヲ差別ス  
 ルコトヲ為ンヤ。唯是差別シテ茲ニ戒慎備豫ス  
 ルコト。治術ニ於テ一大緊要ナルカ為ノニ。  
 右第六十四章。胆汁敗黒病ノ病因ヲ論ス。  
 其病原胆汁敗黒ヨリシテ将来ルノ諸証。悉ク爰  
 ニ挙ントスレハ。甚冗長ニシテ厭ヘキカ為ニ。其

以テ斯ニ從事スルニ足ル程ノ徴候ヲ挙テ之ヲ  
 示サントス。夫レ敗黒セル胆汁ノ鬱積スル所ハ。  
 大約コノ上腹即所謂喜利ノ部ニシテ。門脈ノ中  
 ニ在リ。門脈ノ註。第五章ニ見タリ。是ヲ以テ右ニ云トコロ  
 ノ部ニ當テ苦煩痞悶シテ寒ヘナラヒニ自餘ノ  
 諸証ヲ現スナリ。若シ治セスシテ久ク十分ニ鬱  
 滯スル時ハ。迺チ稍々ニ血脉ニ浸淫シ始リ。終ニ  
 腦中ニ上逆シテ之ニ加ルニ及テハ。迺チ始テ其  
 知覺意思ヲシテ守操ヲ失テ卓立スルコト能ハ  
 サラシム。是ニ於テ患者故ナクシテ鬱憂悲悶シ。  
 間室無人ノ處ヲ好テ獨居スルナリ。此其候ナリ。





ルニ用ユ。此物初次已ニ其朴消タルヘキヲ疑  
フ。再三コレヲ追考覆按スルニ即チ芒消ナリ。  
若シ夫ニテモ思フマヽニ瀉セスハ。是ニ旃那葉  
ヲ浸シ用ヘシ。夫ニ少ク之ヲ清涼ニスルノ計ヲ  
兼施ント要セハ。此ニ加ルニ答末林度少許ヲ以  
テスヘシ。○若シ乳酪清ノ適<sup>ク</sup>乏スルニ値ハハ。  
稀薄ナル大麥水ヲ代用シテ。右ノ菜ヲ服用スヘ  
シ。

右第六十五章。膽汁敗黑病ノ証治ヲ論ス。

予屢之ヲ見ルニ。夫ノ長病ノ後。或ハ衰弱虚脱ノ  
後。又ハ大ニ失血シタルノ後。若クハ婦人産後等  
ニ於テ。箇ノ爵憂悲惋。精神恍惚。意志狂錯スルノ

証ヲ發スル者アリ。予明ニ知ル其是ヲ治スルノ  
法。衰弱虚脱及ヒ亡血失液シタルニ於テハ。其自  
己ヨリシテ腐敗セル壞液ヲ。諸良液ノ自然ニ定  
リテ有ヘキ者ノ中ヨリ取分テ。夫ヨリシテ精氣  
ヲ分利シ。以テ其純粹新鮮ナルヤウニ更<sup>ナ</sup>始シ。精  
神意思ノ從<sup>レ</sup>來ト殊<sup>カ</sup>異ニ爽快ニ復スルコトヲ致  
スノ外。他術ナキノニ。○其治療ヲ施シテ後。彼ヨ  
リ現レ來ル所ノ証モ。予コヽニ經驗シテ覆知シ  
タルコトアリ。夫ハ如何ナルコトソトナレハ。予  
其之ヲ治スルニ刺絡ヲ以テシテ瀉血シ。又瀉劑  
ヲ施シテ之ヲ下シテ。共ニ危篤ニ至レルヲ目撃



ルノミナリ。然レトモ大抵ハ夫ニ痛痒若クハ自  
餘ノ甚<sup>ナ</sup>麼<sup>ニ</sup>カ觸<sup>コク</sup>覺<sup>ホユ</sup>ルノ事アルナリ。○其証候トス  
ル所ハ。只是其患者一箇ノ何<sup>レ</sup>レ厭<sup>ヒ</sup>苦ム所ヲ覺  
ルカ為ニ。平生ノ如ク其身體ヲ安静ニ保持スル  
コト能ハスレテ。此ニ展轉シ。彼ニ反側シ起テ見  
ツ坐シテ見ツ。百般<sup>カウ</sup>計<sup>ニス</sup>較<sup>キヤル</sup>シテ。其<sup>カウ</sup>熬<sup>ニス</sup>不<sup>キヤル</sup>過<sup>レヌ</sup>トコロノ  
苦惱ヲ免<sup>ン</sup>コトヲ營求スルカ故ニ。是ニ因テ其  
身體ヲ動搖シ。須臾モ安スルコト能ハサルヲ以  
テ。即是ノ煩悶ノ微ト察知スヘキナリ。

右第六十七章。煩悶ノ大較ヲ論ス。

前章ニ厭ヒ苦ム所アルヲ此ノ煩悶トストイフ

ト雖モ。身體ノ諸部。四支骨節等ニ患ヒ覺ルノ疼  
痛ナトヲ苦惱スルヲハ。此煩悶ノ中ニハ収メサ  
ルナリ。○何トナレハ夫ハ苦痛ナルモノニシテ。  
煩悶ニハアラス。此ノ煩悶ナル者ハ。只是レ胃腹  
中ノ諸臟等ニ於テ是ヲ覺ルノミヲ謂テ。未タ曾  
テ皮肉及ヒ諸末ニ於テハ。是アラサル者ナリト  
知ヘシ。○是ヲ以テ爰ニ苦痛スル所アラシニ。其  
人煩悶スル所ハ其苦痛スル所ニ於テセス。必ス  
其煩悶スル所ト。其苦痛スル所トハ。相舛錯シテ  
居ルナリ。○凡ソ身體ノ中。此疆爾界ト無ク。表裏  
上下ヲ問ハス。巨細顯微ヲ論セス。齊一合同ニ普

夕承ク悉ク煩テ。閔格スル所ナキ。公行大運ノ一  
元動ノ外ニ。更ニ各自政ヲ為スノ運動ナル者ア  
ルコトヲ發明セリ。今煩悶ヲ發スルヲ為ス所  
ノ者ハ。即其物ナリト。知ヘシ。何ヲカ各自政ヲ為  
スノ運動ト言フ。即是レ肺胃及ヒ子藏等ナリ。○  
右ニ言トコロノ各自政ヲ為スノ諸藏。若シ其官  
能ヲ運營スルニ障礙スル所アルトキハ。輒チ此  
ノ煩悶ノ証ヲ將出シ來ルト意得ヘキナリ。

右第六十八章。煩悶ノ所在ヲ論ス。

總シテ煩悶ヲ為スノ病因ヲ悉ク斯ニ歷舉セシ  
ト要スレハ。事甚浩瀚ニ係ル。○吾輩諸ノ痛ヲ發

スル所ノ原由ヲ見ルコト有テ。是ヲ其撰スル所  
ノ瘍科精選ノ中ニ詳ニス。此ノ煩悶ハ。即其痛ノ  
處ヲ内ニ移シテ。諸藏等ニ及フノ時ニシテ。廻チ  
發スル者ナリ。

右第六十九章。煩悶ノ病因ヲ論ス。

諸末四支等ノ諸部ニ於テ。疼痛ヲ患ルコト有テ。  
既ニシテ其痛消散シ。若クハ又右ノ諸部等ニ於  
テ。皮表ニ發洩浮越シタル諸患等アリシカ。今ニ  
シテ共ニ内陷シテヨリ。此ノ煩悶ヲ發シタルニ  
臨テハ。須ク其毒ヲ再ヒ外表ニ驅逐發散スルニ。  
第四十四章ニ出ス所ノ發汗劑ヲ以テスヘシ。○



ル。固ヨリ治ヲ為シ易カラストク。○發熱強壯ニ  
詳ニ第二十五章ニ於テ之ヲ説ク。○  
シテ運行大過ナル者。亦能ク此ノ煩悶ヲ生スル  
者ナリ。宜ク一夕ヒ刺絡ヲ施シテ其血ヲ瀉シ。尋  
テ清涼劑ヲ以テ是ニ與ヘシ。發熱大過ノ証。第十  
二章ニ見タリ

右第七十章。煩悶ノ治法ヲ論ス。

痲痺篇第十一  
痲ノ病タル羅旬ニ之ヲハ刺利失私ト謂フ。其証  
ヲ言フニ。凡ソ人人常ニ以テ運動舉止ヲ為ス所  
ノ諸筋ニ於テ。多少部今ヲ問ハス。イツレニテモ  
其能ク運動ヲ為ス所以ノ職掌ヲ喪失スルトキ  
ハ。逃<sup>ゼ</sup>不過<sup>ヒ</sup>カナラス各自其機關ノ外發スル所。運  
動コレカ為ニ早<sup>ヤ</sup>不<sup>ズ</sup>早<sup>ヤ</sup>衰崩シテ。屈伸動止復夕其  
意ノ欲スル所ニ隨テ自由ニスルコト能ハス。之  
ヲ名テ痲トスルナリ。○其痲証ノ發スルトコロ  
多クハ善ク併テ箇ノ痛痒ヲ知ルノ機為ニ減レ  
テ麻木スルノ証ヲ為スモノナリ。此證ノ如キハ

内科異原 卷之五 七十一

此病門ニ屬ノ儘可ナリ。然凡其部併テ生氣ノ運  
動絶止スルニ至テハ。便是レ其部ノ死スルニテ。  
此癱証ノ中ニハ収サレナリ。

右第七十一章。癱証ノ大較ヲ論ス

惣シテ身體中ノ諸筋。各自ノ主動ヲ為スコトヲ  
得ル所以ノ原由ヲハ。何物有テ之ヲ資宰スルソ  
トナレハ。是レ他ニアラス。皆生氣ノ充盈シテ。無  
窮ノ神經線ニ由テ。其身體中ノ諸筋ニ索絡スル  
ノ致ス疾ナリ。是故ニ。癱証ノ原由ノ在ル所ハ。腦  
中ヨリ精氣ノ流潮シテ。諸筋ニ及ブノ間ニ存ス。  
其間若シ精氣ノ流注循行ヲ障闕スルコトアル。

皆是レ癱証ノ繇テ起ル所ナリト知ヘシ。○癱証  
ヲ發スルノ原由ハ大抵右ノ通ニテ。其中ニ就テ  
百般ノ不同アルコトヲ辨スヘシ。此其原由自ラ  
彼精氣ノ性ヨリシテ發スル者ハ。潛藏シテ知ヘ  
キナシ。此其精氣ノ自致ス所ニシテ。此ヲ第一ト  
ス。假令ハ偶尔トシテ水銀ヲ誤リ用タルニ因リ。  
或ハ震氣ニ中リ。金鐵寶氣ニ飽悶スルニ因リ十  
トシテ。精氣ヲシテ其便用ヲ失ハシムルノ類是  
ナリ。○第二ハ。神經線ノ自ラ致ス所ニ係ル。或ハ  
外ヨリシテ之ヲ重壓シ。或ハ神經液ノ鬱聚スル  
ニ因リ。或ハ掌急ノ繚戾反張スルノ極ニ因リ。或

ハ外表ヨリ神經室ヲ箝搾シテ。逼テ其液ヲ送ラ  
シムルニ因リナトシテ。精氣其神經ノ諸線ヲ循  
行シテ其支別ニ流注スルニ足ラス。故ニ其神經  
液ノ障礙セラレテ。至リ達セサルノ部。各自ノ運  
用ヲ失フナリ。○其神經室ノ資ヲ始ル所ノ生活  
ノ元運微弱ナル者。亦時有テ偶爾ク癱証ノ原ト  
ナルコトアリ。此其血ノ腦ニ轉輸シテ神經線ノ  
原本ニ資給スルコト富贍ナラサルカ為ニ。神經  
室生活ノ元運ニ因テ其精氣ヲ助テ。夫ヲシテ斯  
ノ如キ微細ノ諸管ヲ循行シテ。其諸末ノ至微至  
細ナル所ニ達セシムルニ足ラサルカ致ス所ナ

リト知ヘシ。  
右第七十二章癱証ノ病因ヲ論ス  
吾人身體中ニ具スル筋ノ諸筋元ヨリ其主用ヲ  
一ニセス。是ヲ以テ其癱証ノ發スルコト。亦各其  
類ニ於テシテ。其証候ヲシテ殊異ナラシムルナ  
リ。此即チ某ノ筋ニ癱スレハ某ノ主用ヲ失フ。各  
各皆カクノ如シ。癱ノ所在ヲ以テ。筋コレカ原由  
ト為リ其証ヲ將來ルナリ其中只外傳ノ筋ヲ用  
ルニ至テハ其因ヲ辨スルコト。殊ニ宜ク意ヲ  
用ユヘキ所ナリ。其筋ヲ用ルコト癱スル所ノ筋  
ニ循行スル神經ノ本ク所ヲ蹤跡シテ。夫ニ外傳

七十三



スルヲ良トス。若シ然ラスシテ。其痲スル所へ傳  
貼シテハ。徒ニ功ヲ費スノミ。其病原此ニ在ラス  
シテ。彼ニ在ルガ故ナリ。○痲証ノ所繇ヲ令別ス  
ルコト。甚夕利アルコトナリ。夫ハ如何ナルコト  
ニ利アルソトナレハ。其令別ニ因テ以テ其痲ノ  
發スル所。思欲ノ向フ所ノマ、ニ支體ヲ運用ス  
ルコトヲ為カタメノ諸筋へ中傷セルカ。將此ノ  
生活ノ運動ヲ為カタメノ諸部へ中傷セルカ。抑  
又各自政ヲ異ニスルノ諸藏ニ中傷セルカト云  
コトヲ知ルニ利アルナリ。○姑ク且ツ之ヲ言フ  
ニ。其精氣ノ灌注スルコト。若シ心藏ニ達セスシ

テ。心藏是カ為ニ痲スル時ハ。隨テ便チ其血ヲ一  
身百體へ流注セシムルノ官能ヲ失テ血液忽チ  
凝住シテ動カス。其人即チ死スト云コトヲ知ル。  
此其生活ヲ為ス所ニ痲スルノ致ス所ナリ。○其  
痲スルコト。若シ唯各自ニ政ヲ異ニスル肺藏ナ  
トノ如キニ發スル時ハ。其病コレヲ喘息氣急ノ  
証ト名テ。死ニ至ラスト知ル。若シ胃或ハ諸腸ニ  
痲スル時ハ。各自其處ニ来ル者。其處ニ鬱滯シテ  
轉送セス。以テ其部ノ閉塞凝結スルコトヲ知ル  
ナリ。○右ノ如キ諸件ヲ茲ニ悉ク陳列セント要  
スレハ。浩博ニ涉ルカ為ニ。只其日常ノ毎ニ用ル

所ノ手近キ。以テ各種ノ痲ヲ治スヘキノ方法ヲ  
ノ之ヲ示ス。是ヲ示スコト左ノ如シ。

右第七十三章。痲証ノ令別ヲ論ス。

茲ニ舉ル所ノ説ハ。誠ニ是レ一技ノ要畧ノ之ナ  
レハ。是ニテ痲証ノ療術カ盡ルト云ニアラス。必  
ス其原由ニ源洄シテ。各自ノ治ヲ為サレコトヲ  
得ス。即チ予カ著ス所ノ捷徑方ノ中ニ説カ如シ。  
因テ今爰ニ唯其日常多ク患ル所ノ証ノ之ヲ記  
セシトスルナリ。○神經室ニ於テ生活ノ元運微  
弱ナル者ハ。必ス其精氣ヲシテ循行ノ勢ヲ盛ニ  
シテ。其筋ヘ灌注セシムルヲ以テ緊要トスルナ

リ。其處必ス神經液ノ鬱蓄スルコト有リテ。其較

著ナルハ神經核ナルモノ生スルナリ。神經核ヲ

シテ神經液ノ鬱蓄シテ。荷蘭ニコレヲ含シ。尚コレヲ

載ス。考ヘシ。此皆其神經ノ運行微弱ナル處ニ於

テ鬱積シ。其形状一二積痰ノ如ク見ユルナリ。其

神經核ノ結在スル所。神經液ノ流注スル者。其處

ニ於テ愈滯著シテ益遏住スルヲ為ナリ。○今

其痲症ヲ治スルノ法。其各種ノ宜キ所ニ隨テ。其

証ヲ察シテ次ノ條件ニ於テ之ヲ撰用シテ可ナ

リ。一ニ曰ク。益神劑。又神經劑ト云。神經ヲ壯ニシ

ニニ曰ク。透肌穿表ノ劑。外表ヨリ摩擦ヲ施シテ皮



又へシ。若シ足不遂スル者ハ。脊推ノ腰關ノ邊  
 ニ直ル者ヲ摩熨スヘキナリ。  
 東方諸國ニ於テハ。一種ノ痲証ニシテ。運動作為  
 生平ノ如ク自由ナラサルノ証ヲ患ルコト常ニ  
 甚夕多シ。其土ニ之ヲ呼テ白栗白栗ト曰フ。是人  
 病常ニ多ク神經液ヨリ發スルナリ。其尤較著ナ  
 ルハ。神經液ノ凝結シテ神經核ヲ成スニ出ツ。其  
 原由ヲ言フニ。其人始メ炎熱ノ氣ニ銷鑠セラレ  
 或ハ慄悍酷熱ノ性アル酒漿ヲ用ルニ因テ。神經  
 液コレカ為ニ流澌散渙スルコト大過ニシテ。後  
 忽チ寒涼ノ氣ニ値ヒ。夕トヘハ露天ニ睡臥シ。又

ハ寒冷ナル石上ニ寢テ。終ニ其神經液ヲシテ多  
 ハ皆凝結シテ其處ニ滯著シ。其精氣ノ神經線ヲ  
 通り。以テ其支末ニ達スヘキノ道路ヲ阻隔セシ  
 ムルニ至ル。是ヲ以テ其人ヲシテ遂ニ其運動ノ  
 進退舉止。生平ノ如ク敏疾保持。其意ノ欲スル所  
 ノ如クナルコト能ハスシテ。右ノ病ト成ルコト  
 ヲ致サ使ルナリ。○然レ凡其凝結シタル神經液。  
 其所ニ底著シテ。久シト雖トモ腐敗スルコト無  
 ニ因テ。患者其疾ヲ齎ナカラ輒チ死セスシテ。長  
 ク世ニ留ルコトヲ得ル者儘コレ有ルナリ。○治  
 法前ニ舉説スル所ニ從テコレヲ治スヘシ。復夕

異論ナシ。只宜ク摩油方中ニ於テ菜味ヲ增益シ。  
香竄ノ諸油ヲ取テコレニ合和シ。以テ温暖ニス  
ルノ性。ナラヒニ透肌穿表ノ力ニ頼テ。其凝結底  
著スル所ノ神經液ヲシテ流動セラルムルヤウニ  
從事スルノニ。

右簿七十四章。癰証ノ治法ヲ論ス。

水腫篇第十二

水腫ノ病。羅甸ニ之ヲ非獨碌布私ト謂フ。凡ソ吾  
人ノ身體ニ徧ク自然ノ玄孔有テ。發出ノ蒸氣ヲ  
含有シ。又脂胞ナルモノアリ。脂有テ焉ニ充ツ。其  
發出ノ蒸氣ヲ含有スヘキ玄孔。及其脂ノ有ヘキ  
脂胞中ニ。入り代テ水液或ハ粘稠液コ、ニ聚リ。  
又ハ細小ナル水道ニ。水液或ハ粘稠液アルコト  
ヲ得ルニ因テ。各其部ニ於テ腫脹スルコトヲ為  
ス。此ヲ名テ水腫ト曰フナリ。○其患或ハ全體ニ  
發シ。或ハ各異ノ諸部ニ發シテ。其名稱ヲシテ多  
端ニシテ記臆認占シカタク。毎ニ善ク彼此相混

清シテ。遂ニ區別處分スルコトヲ得サラシムルニ至ル者ナリ。

右第七十五章。水腫ノ大較ヲ論ス。

予カ撰スル捷徑方ノ中ニ。諸般ノ水腫ヲ發スル病因ヲ歷舉セリ。甚久繁長ナルカ為ニ。爰ニ復夕援引セサルナリ。今只其常ニ多ク患ル所ノ諸証ト其治法トヲ舉テ之ヲ示サントス。

右第七十六章。水腫ノ病因ヲ論ス。

凡ソ歷試考究スルニ。血脉若クハ水道ヲ外表ヨリ鎮壓スルトキハ。其處右ノ諸管。勢ニ逼テ強テ其水液ヲ逆逸スル者。依リ歸スルニ處ナク。因テ

腫起シテ水ヲ持ツコト。察シテ以テ其水ノ盈脹スルコトヲ知ヘキニ至ルナリ。其中宜ク分別スルコトヲ求ムヘキハ。只其血脉ノ之ヲ鎮壓シタルモノハ。則其皮裏青色ヲ發シ。其青脉自ラ破綻シタルカ如キノ色ヲ其部ニ現スナリ。只其水道ヲ鎮壓シタル者ニ及テハ。則其處灰黯色ニシテ。唯水ヲ以テ是ニ盈タルカ如シ。○右類ノ腫ハ。多クハ孕婦ノ足脚。及ヒ人ノ頑痺鬱塞セル藏府等アルガ。其血脉若クハ水道ヲ鎮壓スルノ証ニ於テ之ヲ得ル者ナリ。○人若シ箇ノ藏府若クハ機里爾ノ頑痺鬱結スルノ致ス所ニ係ルト云コト

ヲ覈知スルコトアラハ。宜ク唯其頑痺鬱結ヲ治スルノ法例ニ從テ。治療ヲ安排スヘシ。○若シ只諸般ノ利水ノ劑ノミヲ用ルトキハ。百方ストモ効驗アルコト無ランノミ。知スハアルヘカラス。右第七十七章。水腫ノ血脉及ヒ水道ヲ鎮壓スルニ因ルノ証治ヲ論ス。

凡ソ吾人ノ身體中。苟モ空虧閑隙アルノ處ハ。必悉ク天資自然ノ蒸氣ナラヒニ湛露アリ。其質稀清ノ淡水ニシテ。物ヲ潤霑スルノ性有テ。終古ニ動脈ノ諸末ノ究竟スル所ヨリ出來ルナリ。倘クハ亦神經ノ諸末ノ究竟スル處ヨリモ出來ルコトアルナリ。○更ニ喩尿管ナル者アリ。其水氣ヲ受テ諸ヲ水道ト血脉ト二分輸スルヲ主ル。平人ニ於テ其官能健ニシテ全キ者ハ。其水氣隨テ集レハ隨テ喩収ス。滲利便捷。濡滯有<sub>レ</sub>ナシ。○其水氣ヲ承テ是ヲ水道ト血脉トへ分輸スル喩尿管。其天稟ノ運用虧損スルコトアルカ。若クハ其管ノ究竟塞ルカ。抑マ夕其喩収スル所ノ水液。粘稠已甚ナルカ。斯ニ一モ有レハ。則チ蒸出ノ水氣ヲシテ。空ク其處ニ滯テ滲利ニ所ナク。夫ヨリシテ終ニ蓄積シテ腫脹ヲ其部ニ發セシムルナリ。○夫水氣ヲ承テ諸<sub>レ</sub>ヲ血脉ト水道トへ分輸スル

トアルナリ。○更ニ喩尿管ナル者アリ。其水氣ヲ受テ諸ヲ水道ト血脉ト二分輸スルヲ主ル。平人ニ於テ其官能健ニシテ全キ者ハ。其水氣隨テ集レハ隨テ喩収ス。滲利便捷。濡滯有<sub>レ</sub>ナシ。○其水氣ヲ承テ是ヲ水道ト血脉トへ分輸スル喩尿管。其天稟ノ運用虧損スルコトアルカ。若クハ其管ノ究竟塞ルカ。抑マ夕其喩収スル所ノ水液。粘稠已甚ナルカ。斯ニ一モ有レハ。則チ蒸出ノ水氣ヲシテ。空ク其處ニ滯テ滲利ニ所ナク。夫ヨリシテ終ニ蓄積シテ腫脹ヲ其部ニ發セシムルナリ。○夫水氣ヲ承テ諸<sub>レ</sub>ヲ血脉ト水道トへ分輸スル

喻尿管其カラ失テ以テ此患ヲ致スコト。人ヨク  
是ヲ思惟シ及スコト稀ナリ。乃チ徒ニ以テラク  
此患ヲ將來ルハ。常ニ皆其部ノ閉塞スルニ出ル  
ノコト。夫レ動脈ノ爰ニ至トシテ掌ル所ハ。其血  
中ヨリ水液ヲ分利シテ。其究竟ヨリ是ヲ送り出  
ス迄ハ以テ其任トスレトモ。其流レ出タル所ノ  
水氣ヲ。尿管ノ衆口ヲシテ是ヲ酌飲セシムル  
迄ハ。カラ為スコト能ハサルナリ。然ラハ則チ其  
動脈ヨリ送り出シタル後ヲ承テ隨テ即チ是ヲ  
滲利シ。以テ是ヲ水道ト血脉トヘ分輸スルコト  
ヲ為ハ。其尿管ノ元運ノ自ラ主理スル所ニ係

ルコト必セリ。○是故ニ右ノ元運其主能ヲ喪フ  
コト有トキハ。逃<sup>カ</sup>不過<sup>ス</sup>水液ヲシテ空虧閑隙ニ聚  
蓄セシムルコトヲ致スト知ヘシ。○透肌穿表ノ  
菜ハ。皆能ク血脉ノ運行ニテモ尿管ノ元動ニ  
テモ。差別ナクコレヲ増益シテ強盛ナラシム。即  
吾輩ノ經驗スル所。以テ動脈ノ運行ヲ強壯ニシ  
テ終ニ水腫ヲシテ治セシム。透肌穿表ノ菜ノ水  
腫ヲ治スルニ於ル。殆ト是ヲ外ニシテ有コトナ  
キノコト。然トモ是ニテ何ニ原ク水腫ニテモ一以  
テ之ヲ貫キ治スルト謂フニハアラス。人宜ク是  
ヲ用テ可ナルノ例ヲ講習シ得テ之ヲ施スヘシ。



須ク諸脉ノ運行ヲ増益シテ宜キ証ニシテ乃チ  
是ヲ用ユヘキナリ。○若シ其水腫箇ノ罨敷劑ヲ  
施サル、ノ証ニ値ハハ。宜ク下ニ出ス方ヲ用ヘ  
シ。

驅水散腫ノ罨敷劑方

薄荷葉

茵陳葉

玫瑰花

肉桂

乳香

各一溢

二撮

各一錢

右件合シテ蒸餅ノ中心濡粘ナル者ト蒲桃酒

トヲ用テ罨布ヲ造リ注第六十二熱ニ乗シテ

患處ニ罨貼ス。日ニ再ヒ之ヲ換ヘ新ニスヘシ。

外ニ散劑アリ。右ノ罨敷劑用ル所へ是ヲ外傳ス

ルモ亦得。次ニ出ス。

驅水散腫ノ外襯散方

乳香

格碌波尼亞

定粉

玫瑰花

二錢

四錢

十六錢

四錢

世ノ瘻家皆松香ヲ代  
用ス必ス以此アラン

右件末トナシテ是ヲ合和シ。其多少用ニ適フ  
ヲ取テ一箇ノ小巾ヲ炙リ熱セシメ。攤シ得テ

茶末ヲ其上ニ播敷シ。以テ腫處ニ襯ス。是ヲ更  
換スルコト日ニ數回ナルニ宜シ。少キモ兩度  
ニ下ルヘカラス。若シ其腫大ニシテ外襯須ク  
廣大ニスヘキ者ハ。是ニ加ルニ糠ヲ以テ相  
和セシメ。箇ノ布袋ニ盛テ以テ襯貼スルモ亦  
可ナリ。

若シ夫レ内茶ヲ用テ宜キモノハ。併テ小便ヲ利  
シ且ツ強壯ナラシムルノ劑ヲ用ヘキナリ。  
運行ヲ壯ニシ小水ヲ利スル茶酒方

水揚梅根 八錢  
高良薑根 一四錢 小者

杜松子 八錢  
刺發私子 四錢

根及ヒ子性温。小水ヲ利シ。諸毒ヲ解シ。膨  
脹ヲ驅散分疏ス。案スルニ獨活ナルヘシ。

薄荷葉 二溢  
右件諸菜。勃的利斯ニ一箇半ノ蒲桃酒ヲ用テ  
浸シ茶氣ヲ泡出シ。尔黙兒苴ニ一盃ヲ飲服ス  
ル。日ニ四次。

右第七十八章。水腫ノ喻尿管ノ災障ニ因ル  
ノ証治ヲ論ス。

元來血ノ遍身百體ヘ流注循行スルコト。膏ニ心  
藏コレカ源ト為テ。其ヲシテ爾ラシムルノ官能

ニ係ルカ為ノニアラス。又動脈ノ元運コレヲ  
 遍身百體ノ諸末杪萬支別ニ推盪轉輸ニ進ルコ  
 トヲ左右ルニ頼ルナリ。豈啻ニ遍身百體へ推盪  
 轉輸ニ進ルノ其元運ニ頼ルノニナランヤ。其血  
 ノ再ヒ心藏ニ還リ入ルト。諸液ノ是ト偕ニスル  
 者ニ至ルマテ。亦是ノ血脉ノ元運。左右テ以テ是  
 ヲ遍身百體ノ諸末杪萬支別ヨリ喻収會歛シテ  
 心藏ニ還リ入シムルニ頼ルコト。又猶動脈ノ元  
 運心藏ノ官能ヲ左右ルガ如キノニ。○若其血脉  
 ニ於テ血ヲ心藏へ還シ納ルノ力衰弱スルト  
 キハ。諸液之カ為ニ流利セス。其彰著ナルハ血脉

ノ細別ニ満盈シ。水道ノ纖支ニ充塞シテ。以テ血  
 脈ヨリノ漏溢ヲ致スコト。上ニ説ク所ノ鎮壓ニ  
 因テ水腫ヲ發スルト。頗ル其趣ヲ同クスト知ル  
 也。○第七十七章血脉ノ運行衰弱ナルヨリシテ  
 氷腫ヲ發スル者。其偏體一處ニ發スルト満支渾  
 身盡ク之ヲ患ルトニ論ナシ。共ニ徒利水ノ計ヲ  
 擬議スルノニテハ效驗アルコトナシ。其血脉  
 ノ運行ヲ増益スルノ術ヲ須テ得<sup>ズハナク</sup>。○其水液過  
 多ニシテ腫滿大甚ナルニ非ルヨリハ。治法其始  
 ハ先ツ已ニ第七十八章ニ説タル所ノ茱ヲ用ヒ。  
 從テ患者ヲシテ朝饌暮餐ノ間。箇ノ肉桂ヲ以テ

燕羞常供ニ充テ。日ニ頻々ニ之ヲ嚼嚙セシムヘ  
シ。而シテ其身體ヲ運動シ。兼テ按橋導引ヲ為シ。  
以テ血脉ノ運行ヲシテ。常度ノ外ニ越ユル程ニ。  
循環ノ便ヲ得セシムルヲ妙トス。此其血脉ニハ。  
管中ニ膜辦アリテ爰ニ節次シ。遍身百體ノ諸末  
抄萬支別ヨリ喻収會斂シテ。心藏ニ歸納セシム  
ル。血ヲシテ。退轉却行ヲ為サラシムルカ為ニ。  
血其送迎開闔ヲ聽テ。等ヲ逐ヒ級ヲ拾テ然シテ  
後前行スルコトヲ得ルカ故ニ。速ニ循行セシメ  
易カラサルニ因テナリ。○更ニ又箇ノ摩術ヲ施  
シテ以テ其治ヲ羽翼スヘシ良トス。

水腫ヲ治スル熏摩方  
乳香ヲ若クハハ鵲栗拔奴謨ム  
承スル所蘇合香刺失チ斯ス是ナリ又蘇多刺吉私伝  
及ヒ自餘右ノ如キノ菜ヲ以テ熾炭ノ中ニ  
指撒シ。箇ノ小瓊屬ヲ取テ其烟氣ニ熏シ。以テ  
コレヲ煎摩ス。  
右第七十九章。水腫ノ血脉ノ運行衰弱スル  
ニ因ルノ証治ヲ論ス。  
凡ソ吾人ノ平全ナル身體中ニ在テ平全ナル諸  
液トイヘトモ。若シ其流動スルコト希ナルトキ  
ハ。輒チ相聚テ凝泣スルコト是其性ナリ。○マ夕

内科異要 卷之五 八十 二十五

身體中凡百ノ道路ニハ。必ス天造自然ノ滑液アリテ。其周圍ニ灌注浸漑シテ。諸物ノ通行ヲシテ。蹇澁凝滯ノ患ナカラシメ。且以テ諸毒ノ夫ニ侵刺襲入スルヲ防禦排斥スルコトヲ為スナリ。○右ノ流動スルノ諸液ト灌溉スルノ滑液ト。共ニ過不及ナキ平常ノ運行流動ニ因テ凝泣セスシテ。恒當ヲ保スルコトヲ得。諸液ヲ指テ云フ。平常ノ灌溉盈潮ニ頼テ。其主用ヲ曠クセサルコトヲ得ルナリ。滑液ヲ指テ云フ。若シ其諸良液流動スルコト已夕希ナルカ。又ハ滑液ノ灌溉盈潮過度ナルニ値トキハ。粘液腫ヲ發スルナリ。是ヲ治スルノ法。先ツ第

一二稠ヲ稀ニシ凝ヲ釋クノ劑ヲ以テ其粘稠液ヲシテ流動セシムルニ非ルヨリハ。是ヲ驅逐利除スルコト能ハサルナリ。粘稠ヲ稀釋スル茶酒方

茵陳葉 二溢

山龍膽葉 一溢

杜松子 八錢

酒石鹽 二錢

右件是ヲ勃的<sup>ボウ</sup>里斯<sup>リス</sup>ニ一ツ半ノ蒲桃酒ヲ用テ浸シ菜氣ヲ泡出シ。尔<sup>ル</sup>默<sup>ク</sup>兒<sup>イ</sup>苴<sup>キ</sup>ニ一盃ヲ飲服スル。一日ニ四次。

右第八十章水腫ノ粘稠液ニ因ルノ証治ヲ論ス。

若シ凝泣セル諸液ヲ解釋稀薄ニスルノ方法ヲ用ユト雖モ其腫隨テ即チ消散セサル者ハ此其水液過多ニシテ身體ニ腫滿シ生活ノ元運コレヲ推盪疏導スルコト能ハサルノ證ナリト知ヘシ。茲ニ數方ヲ列ス。宜クコレヲ撰用スヘシ。○第一ヲ吐劑トス。方ハ第十五章ニ見ヘタリ。是ノ方其粘稠液ノ胃中ニ充塞スルノ證ニ施シテ甚タ良ナリ。且其患人吐スルコトヲ為シ易キノ證ニシテ乃チ是ヲ與フヘシ。若シ然ラサルトキ

ハ患人ヲシテ許多ノ騷擾ヲ經テ然レテ後ニ吐セシムルカ故ニ吐ヲ得ルノ後ニ遺スニ罷勞ノ患ヲ以テスルナリ。○第二ヲ下劑トス便チ左ニ示ス。

瀉水	方	一錢	世
瓦而拔奴	護	之	蠶
蘇甘謨	扭母	代	石
火炭母	草根	フ	楮
酒石鹽	三分	必	樹
葛縷子油	五滴	ス	脂
		以	ヲ
		有	用
		ン	テ

○内科異要 卷之五 八十一

吹防風<sup>云</sup>西<sup>代</sup>用<sup>ス</sup>据<sup>ル</sup>二<sup>苗</sup>  
香<sup>及</sup>七<sup>時</sup>蘿<sup>ヲ</sup>代<sup>用</sup>ス<sup>ヘ</sup>シ<sup>二</sup>苗<sup>一</sup>  
右件合<sup>シ</sup>テ調<sup>勻</sup>シ。每<sup>一</sup>錢二十九ト為<sup>シ</sup>。日<sup>二</sup>

三次コレヲ三丸ワ、用<sup>フ</sup>。須<sup>ク</sup>下利ノ多少ヲ  
視<sup>テ</sup>其服<sup>度</sup>ヲ増<sup>減</sup>ス<sup>ヘ</sup>シ。即<sup>チ</sup>日<sup>二</sup>圍<sup>ニ</sup>上<sup>ル</sup>  
コト三四回ナルヲ以<sup>テ</sup>度<sup>ト</sup>ス。其夥<sup>ク</sup>水液ノ泄  
除<sup>シ</sup>テ大<sup>ニ</sup>從<sup>來</sup>ト証<sup>候</sup>ノ衰<sup>ル</sup>ニ至<sup>ル</sup>マ<sup>テ</sup>ハ。  
此<sup>レ</sup>茶ヲ渝<sup>ズ</sup>シテ用<sup>ヘ</sup>シ。若<sup>シ</sup>患<sup>者</sup>罷<sup>困</sup>耗<sup>損</sup>シ  
テ氣<sup>力</sup>虚<sup>極</sup>スルコト有<sup>ル</sup>ニ至<sup>ラ</sup>ハ。迺<sup>チ</sup>二<sup>度</sup>  
一<sup>度</sup>交<sup>遞</sup>シテ一<sup>二</sup>ノ強<sup>壯</sup>ナ<sup>ラ</sup>シム<sup>ル</sup>ノ劑  
ヲ用<sup>テ</sup>可<sup>ナ</sup>リ。爰<sup>ニ</sup>又<sup>其</sup>兩<sup>功</sup>ヲ兼<sup>子</sup>全<sup>セ</sup>ル喜  
賞<sup>ス</sup>ヘキノ良<sup>方</sup>アリ。其運<sup>行</sup>ヲ強<sup>壯</sup>ニシ又<sup>能</sup>

久<sup>ク</sup>下<sup>利</sup>セ<sup>シ</sup>ム。即<sup>チ</sup>左<sup>ニ</sup>示<sup>ス</sup>。  
運<sup>行</sup>ヲ壯<sup>ニ</sup>シ大<sup>便</sup>ヲ利<sup>ス</sup>ル瀉<sup>水</sup>飲<sup>方</sup>

白<sup>芷</sup>根 各<sup>八</sup>錢  
水<sup>揚</sup>梅<sup>根</sup> 各<sup>八</sup>錢  
薄<sup>荷</sup>葉 二<sup>溢</sup>  
旃<sup>那</sup>葉 四<sup>錢</sup>  
酒<sup>石</sup>鹽 二<sup>錢</sup>  
右<sup>件</sup>是<sup>テ</sup>勃<sup>勃</sup>的<sup>利</sup>斯<sup>ニ</sup>一<sup>箇</sup>ノ蒲<sup>桃</sup>酒ヲ用<sup>テ</sup>浸  
シ。茶<sup>氣</sup>ヲ泡<sup>出</sup>シ。尔<sup>ル</sup>默<sup>兒</sup>苴<sup>ニ</sup>一<sup>盃</sup>ヲ飲<sup>服</sup>ス<sup>ル</sup>  
一日<sup>二</sup>三<sup>次</sup>或<sup>ハ</sup>其<sup>餘</sup>モ服<sup>シ</sup>テ可<sup>ナ</sup>リ。但<sup>患</sup>者  
ヲ<sup>シ</sup>テ其<sup>通</sup>利<sup>ヲ</sup>常<sup>ヨ</sup>リ度<sup>數</sup>多<sup>カ</sup>ラ使<sup>ル</sup>ヲ期

内<sup>科</sup>異<sup>書</sup>  
卷<sup>之</sup>五  
二<sup>十</sup>七

トス。

第三ハ是レ利尿。此其患者ラシテ唯其小水ヲノ  
 之夥ク滲利スルコトヲ為サシムレハ。大便ヲ下  
 利スルヨリハ其虚憊スルコト迥ニ鮮浅ナリト  
 スルカ故ニ。此ノ利尿方ヲ以テ良トスルナリ。前  
 節ニ於テ强壮ニスルト下利スルトヲ兼子施夕  
 ルカ如ク。是ニ於テモ亦爾セシコトヲ要セハ。第  
 七十八章ニ出ス所ノ利尿ノ酒劑ヲ用ヘキナリ。  
 ○爰ニ云トコロノ利尿ノ酒劑ヲ用ヒ。又上文ニ  
 於テ記スル所ノ瀉水飲ヲ取テ。方中ニ就テ只シ旗  
 那ノ一味ヲ除テ是ヲ用ヒ。其運行ヲ强壮ニシ且

ノ水液ヲ利尿ヨリシテ瀉シ去テノ後ハ。其腫再  
 ヒ復スルコトナク治スルナリ。○爰ニ又良薬ア  
 リ。是証ニ臨テハ。亦右ノ利尿酒ノ中若クハ瀉水  
 飲ノ中ニ加ルニ肉桂ヲ以テシ。浸シテ其蒸氣ヲ  
 泡出シテ是ヲ用ルトキハ。益佳ナリ。凡ソ肉桂ハ。  
 此ノ水腫ノ病ニ於テ一大貴品ニシテ。其運行ヲ  
 シテ强壮ナラシムルノ功。復夕與ニナキノ良薬  
 ナリト知ルヘシ。  
 右第八十一章。水液過多ニシテ腫満大甚ナ  
 ルノ証治ヲ論ス。



西說内科撰要卷五終

○

西說内科撰要卷六

遠西

玉函涅斯垓我爾德兒 著

日本

津山

宇田川玄 隨晉

譯

醫官法眼桂川甫周國瑞 閱

病屬頭腦

昏睡篇第十三

昏睡ノ起ル所ヲ原ルニ。夫レ寢息ト興寤トハ更  
 其用ヲ相為シ。生人平安ノ體ノ。必ス須ツ所ニシ  
 テ。生命ノ無ハアルヘカラサル一大緊要ノ事ナ

リ。二ノ者人ヨリ求テ致スニ非ス天性自然ノ安  
 排ニシテ。強テ違フヘカラサル通欲トナリ。興寤  
 ヘキノ時ニ當テハ。睡ルコトヲ欲セス。睡ルコト  
 ヲ要スルノ時ニ臨テハ。寤ルコトヲ欲セサルナ  
 リ。大抵其寤ルコト定期有テ。其間心意ヲ發シ身  
 體ヲ運用シテ。以テ寢息ノ期ニ至リ。其寢息スル  
 コト。亦定リタル節限有テ興寤ノ期ニ至リ。二ノ  
 者一方ニ偏ナル甚シキ修短アラサル者ナリ。是  
 故ニ寤ヘキノ寤メ。睡ルヘキノ睡リ。寤寐必ス相  
 變連シテ滞ナキ者ハ。身體康健ノ繇テ生スル所  
 ナリ。○然ルニ生平定リタル期節ニ興寤スト雖

モ。晝間神思聰慧ニシテ衆務ヲ修理スヘキノ時  
 ニ當テ。睡ヲ欲スルコト甚クシテ遂ニ睡卧スル  
 ニ至リ。或ハ又平全無病ノ人。常トシテ興寤スル  
 ノ期ニ。尚睡卧シテ寤サルノ証アリ。此全ク平安  
 ナルノ候ニ非スト雖モ。之ヲ起ストキハ輒キ應  
 シテ寤メ。又之ニ命シテ卧スコト勿ラシムレハ。  
 則チ能ク勉強シテ以テ睡サルコトヲ得テ其時  
 ヲ経ルナリ。此即チ本篇論スル所ノ病ノ最モ輕  
 キ者ニテ。是ヲ私ス毫ラ百立迄ヒ竭意度ト云。嗜ク眠ク云。其  
 重キ者ニ至テハ。即是本篇主トシテ論スル所ノ  
 病。夫ヲシテ醒寤セシメント要スレトモ。容易ニ

覚シムヘカラス。偶爾夕醒寤スルコトヲ得ルカ  
トスレハ。隨テ輒千復夕睡ル。此ヲ名テ昏睡ト云  
ナリ。昏冒 齟齬 須臾 寤ノ 義。原名云。羅旬ニ是ヲ卒剥ソッポ兒ト云。  
此其昏睡スルノ深メ長キハ。元来不平ノ病原有  
テ。夫ヨリシテ發シ来ルノ証ナリト知ヘシ。

右第八十二章。昏睡ノ大較ヲ論ス。

凡ソ平常ノ睡眠ハ。是神思ヲ休息セシムルノ致  
ス所ニシテ。精神思欲是ニ因テ以テ十分ニ寢息  
スルカ故ニ。寢息ノ間ハ。外ニ應スルノ思欲。色聲  
香味等ノ如キニ觸ルハ。コト無ク。又其内ニ存ス  
ル生平知識シタル凡百ノコトモ。思念スルコト

無キナリ。○偶爾夕多夢紛擾展轉反側ナトアル  
時ハ。睡眠十分ニ其常ニ從テ饜足スルコト能ハ  
ス。精神コレカ為ニ息スルコトヲ得ス。見ツヘシ  
睡ハ是レ神息ノ必ス須ツ所ナルコトヲ。○自餘  
睡中ト雖モナラ休息セサル者ハ。心藏ノ運動。脉  
行ノ循環。ナラヒニ夫ノ各自政ヲ異ニスル。氣息  
ノ吐納。腸胃ノ化熟。腎胞ノ滲蓄等ナリ。是ラ皆晝  
夜ヲ捨ス。息止スルノ期ナシ。○是ニ由テ之ヲ觀  
レハ。精神思欲ノ運動ハ。是レ睡中ニ於テ休息シ。  
其他ノ諸物ハ。生ヨリ没スルニ至ルマテ。終古トシナニ其  
官能ノ運営ヲ休止スルノ間隙ナキコトヲ知ル。

○其寤寐ヲ為スコトヲ主ルノ一器ニ。障礙アル

ノ多少ニ因テ。許多ノ疾患ヲ生シテ異ナラシム

ルト。其他各異ノ諸因ニテ其官能ヲ障礙スルニ

因テ諸証ヲ發スルト。說者ヲシテ名物混淆シ。紛

絮ニシテ殆ト辨別ヲ為カタキニ至ラシム。○夕

トヘハ若シ昏睡來ルコト暴卒ニシテ發シ。其睡

ルコト深シテ醒寤スベカラサルヲバ。之ヲ私寤

布病ト謂フ。ト一翻ニ白羅の的ト名ク。私寤

卒中昏冒不省。列事好ト証云。羅鯁ニ昏亂ト

酒過度ニシテ。大醉セルヨリ發シ。及ヒ催睡菜ヲ

誤用シタルニ因テ然ルヲモ。亦槩シテ之ヲ名ル

ニ私寤布ヲ以テスルナリ。其由未スル所ノ原則

同シ。私寤布ハ即○昏睡ノ証タル。善ク熱病ニ於

テ發スル者ナリ。然ルニ今熱モナク。惟漸々ニ起

ル者。之ヲ名テ可麻ト云。其可麻ノ過度ナル者。是

○内科異要 卷之六

トヲ覺フ。蓋シ其元未紛雜シテ明哲ナラサルニ  
因テ致ス所ナリ。○予其名目毎ニ。悉クコレニ充  
ルニ腫テ特ル兒ド獨イ逸ツ都ノ即和蘭本ノ言ヲ以テスルコト  
ヲ知ル。然トモ其譯名の切ナラス。齟齬出入アリ  
テ相對スヘカラサルニ因テ。且ツ依違シテ姑ク  
置クノミ。○療術ニ從事スル者ニ於テハ。只其各  
自ノ原由ノ是ノ昏睡ヲ發スル所以ヲノミ專一  
ニ蹤跡シテ。以テ洛伯ノ治法ヲ敷置スルヲ宜ト  
スレハ。其所ニ到テハ徒ニ忽ニシ過ルコトヲ為  
スベカラサルナリ。何トナレハ。右ノ諸名稱。歷々  
トシテ稱擧スヘキカ如キニ似タレトモ。其實ハ

疾ヲ治スルニ益ナシ。但其諸証ノ原由ヲ求レハ  
皆昏睡ノ原ヨリ將出シ來ル者甚多トスルノミ  
右第八十三章。昏睡病ノ分別ヲ論ス  
凡ソ興寤シテ精神外物ト相接リ相持スルノ間  
ハ。必ス幾多ノ精氣度ニ適シテ腦中ヨリ揮發シ  
テ。諸器ニ散布スルコトヲ須テ。然シテ後能クス  
ル者ナリ。是ヲ以テ諸ノ原由。其精氣ノ常ヲ奪失  
シテ變易セシメ。或ハ凝止シテ行カス。或ハ腦中  
ニ於テ精氣ノ散布ヲ鑿定シテ達セシメザルガ  
如キ者。即チ此ノ疾ヲ將出シ來ルナリ。○此ノ疾  
ヲ發スルノ諸因。甚多シテ枚擧ニ暇アラス。故ニ

内科異義 卷之六 八十四

其尤彰著ナル諸証ノミヲ援引シテ。附スルニ各種ノ諸徵候。ナラヒニ治法ヲ以テスルノミ。

右第八十四章。昏睡ノ病因ヲ論ス。

居常ニ出血ノ患アルノ人。日ヲ累子月ヲ経テ。其間遏止シテ外泄セホルノ後。或ハ夥ク飲食ヲ為シ。動作運行スルコト稀ナルガ。今ニシテ俄ニ非常ノ労働ヲ作シ。又ハ奮迅發怒スルコト有テ。夫ヨリシテ倏忽トシテ外ニ應スルノ精神。ナラヒニ内ニ記念スル所ノ意識ヨリ。身體ノ運動。諸竅ノ營為ニ至ルマテ。悉皆廢絶シ。留メ得テ只是ノ顔面貴盈シテ赤色ヲ發シ。其脉剛盛ニシテ實。其

呼吸深ク。軒息スルコトヲ為ハ。知ヌヘシ是レ血

ノ過多ニシテ。腦ヲ壓塞スルガ致ス所ナルコト

ヲ。此証ニ値コトニ。人コレヲ呼テ白羅尔的ベロウルの即チ

昏冒不省人事ノ証。是ナリ。卒中ト云。治法宜ク先

第一ニ刺絡シテ其分支ノ宜キ部ニ於テ瀉血ス

ヘシ。若シ一頓ニシテ足ヲサルトキハ。復再ヒ瀉

血スヘシ。隨テ醋アルヒハ冷水ヲ以テ其面ニ喫

キ。患者ヲシテ微ク首ヲ高シテ卧シメ。吉利詞ケキトス

兒ル即尊術ナリ。注ハヲ施シテ。其便利ヲ導クベシ。

吉利詞ケキトス參兒方

旗那葉 六錢

消石 二錢

蜜 八錢

右件合シテ。コレヲ煮ルニ百二十八錢ノ水ヲ以テシ。九十六錢約多ヲ取テ。温ニシテ水鏡ヲ用テ注射スヘシ。此一劑須ク暫時ニ悉ク是ヲ用ヒ盡スヘキナリ。

右ノ如クニシテ患人醒復セハ。空ク第十二章ニ記スル所ノ下劑ヲ用テ次ニ施シ。是ヲ以テ再ヒ瀉血スルノ舉ニ代フヘキナリ。

右第八章十五章。昏睡病ノ血ノ過多ニ因ルノ証治ヲ論ス。

爰ニ血ノ騷擾シテ頭腦ニ上逆スルヨリシテ發スル一箇ノ昏睡アリ。其人素ト暫留セル發熱ニ嬰リ。頭部大ニ熱スルコト他ノ部ヨリ甚シク。又頭部ノ動脈尽ク鼓動スルコト。他ノ部ニ比スルニ大ニ甚シク。時々自ラ幾多ノ小星點ノ眼中ヨリ飛送シ。又數條ノ光芒。散亂シテ眼中ヨリ閃發スルカ如クナルヲ見ルコトアリ。且耳中頻ニ嘯吹蟬鳴ヲ聞キ。顔面賁盈シテ赤色ヲ發スルノ証ニ値ハ、則チ知ヘシ是レ頭部ニ血ヲ送ルノ動脈。其運動ノ増盛スルコト。自餘ヨリ甚キノ徵ナルコトヲ。○右ノ証ニシテ其始テ睡寐ヲ為スコ

ト多シテ。平常ニ異ナルノ候アルニ値ハ、直ニ  
 輒チ其將ニ是ノ昏睡ニ至ントスルコトヲ恐ル  
 へシ。之ヲ療スルノ法。一ニ前章ノ血ノ過多ヨリ  
 發スルノ治ト同ク從事スへシ。只是其熱替雷セ  
 ル一証ノ存スルカ為ニ。隨テ即チ第十二章ニ論  
 スル。運動大過ノ熱病ニ用ル所ノ菜ヲ用へキナ  
 リ。

右第八十六章。昏睡病ノ血ノ頭腦ニ上逆ス  
 ルニ因ルノ証治ヲ論ス。

搥シテ粘稠液ノ中ニ酷厲毒ノ混シテ隱伏シ在  
 ルニ非ルヨリハ。廼チ其寒ト與ニ相搏ト雖モ。其

所在ノ運動ヲシテ減少セシムルコトハ。未夕嘗  
 テコレアラサル者ナリト知へシ。○人アリ若シ  
 先時已ニ頭ニ白色ニシテ柔軟ナル微腫有テ。其  
 部冷テ重キコトヲ覺へ。且ツ頑麻スルコトヲ患  
 ヒ。自後漸々ニ寐コトヲ思ヒ眠コトヲ嗜ムノ証  
 始リ夕ラハ。當ニ恐レ戒ムへシ此ノ証。尋テ増劇  
 シテ熱ナクシテ昏睡ニ至リ易ク。或ハ又俄ニシ  
 テ白羅爾ベロール的テ冒即チ私ス不省人布事ノ証中ナリ。ニ陷ルコト甚  
 夕速ナル者ナリ。○其時ニ臨テハ。是ヲ醒寤スル  
 ヲ以テ極テ甚夕緊要ナリトス。或ハ人聲物響ヲ  
 以テ喚復挽回シ。或ハ刺戟抵觸ヲ以テ警發省覺

内科摘要 卷之六 八十七



或ハ香竅揮發ノ菜品ヲ以テ鼻中ニ納ルヘシ。  
 即チ硝砂精若クハ乾白揮發鹽ヲ用ユヘキナリ。  
 揮發鹽ハ元ト生作物自然ノ體中ヨリ出ルモノナリ。  
 其製造シテ擬作スル所ニテハ九種ノ生動物類  
 揮發鹽ト云テ之ニ在テハ温煖ノ氣ヲ得レハク飛走竅宣布  
 ノ體中ニ在テハ温煖ノ氣ヲ得レハク飛走竅宣布  
 開テ撒ルテ福刺室列ト云ル即チ揮發鹽一種ノ取テ以  
 テ茶用ニ共ス。例スルニ等。是ナリ。全體ニ得ル者ハ  
 蚯蚓及ヒ蛇ノ等。是ナリ。全體ニ得ル者ハ  
 ノ部ニ得ル者ハ。結血及ヒ尿ニ得ル者ハ。腦髓ノ流動ハ  
 ナリ。コレヲ堅ハ。安結定ノ部ニ得ル者ハ。腦髓ノ流動ハ  
 ノ野牛蹄天靈ト蓋。安結定ノ部ニ得ル者ハ。腦髓ノ流動ハ  
 乾白揮發鹽ヲ造ル方  
 硝砂  
 生石灰

右件各別ニ細末ト為シ。合シテ硝子ニ入レ。之  
 ヲ振動シテ。中ニ於テ相ヒ混和セシムル時ハ。  
 悍烈ナル香氣ヲ發スルナリ。其時コレニ加ル  
 ニ。羅思馬理奴護ノ油。若クハ刺賢需辣ノ油。若  
 クハ橙皮油數滴ヲ以テシテ。コレヲ鼻孔ニ當  
 ヘシ。以テ其菜氣ヲシテ吸氣ニ隨テ腦中ニ至  
 リ達セシム。  
 患者若シ都テ能ク醒覺スルニ至ルトモ。尚宜ク  
 其嗜劑ヲ反覆シテ用ルヲ妙トス。以テ腦中諸部  
 ヲシテ。其運動ヲ増發セシメ。是ニ由テ以テ其粘

稠液ヲ解散稀豁スルナリ。○尋テ善証ノ出来リ。故ニ復スルニ至ラシムルノ標的トスル所ハ。箇ノ發泄ノ術ヲ行フヘシ。即チ誘嚏藥ヲ用テ。患者ヲシテ屢嚏ヲ發セシムルナリ。  
誘嚏藥方

薄荷葉

茉莉刺那葉

藿香葉

霸王鞭

各一錢  
六分錢之一  
右件散劑ト作シ。少許ヲ用テ鼻中ニ納ル。若シ未ク十分ニ驗アラスハ。乃チ宜ク霸王鞭ヲ増

益スヘシ。

又宜ク其項ニ貼スルニ斑蝥ヲ以テスヘシ。是ヲ發疱術ト云。菜物ヲ外貼シテ。水疱ヲ發シ。又ハ赤色ヲ作ノ術。種々アリ。室函ニ詳ナリ。

發疱術方

斑蝥

適宜

右件細末ト為シ。何ニテモ粘膠セル液ヲ用テ泥ト為シ。錢大ノ如クニシテ是ヲ貼ス。

其間須ク下劑ヲ用テ其大便ヲ利スヘシ。此其頭中ノ粘稠液ヲ降下スルカ為ナリ。其方第八十一章ニ出ツ。又且ツ諸般ノ疏緩鬆解スルノ菜劑ヲ用ヘシ。以テ其粘稠液ヲ稀薄ニシテ瀉除スヘカ

ラシムルカ為ナリ。其法方一ニ是ヲ上ノ水腫篇  
第八十一章ニ於テ登示ス。

右第八十七章。昏睡病ノ粘稠液ノ閉塞ニ因  
ルノ証治ヲ論ス。

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

不寐篇第十四

夫レ寢息ト興寤トノ期節アルコト平全無病ノ  
人ニ於テハ。各自ノ恒習アリテ。一槩ニ嚴ナル定  
限アルコトヲ得ス。其體ノ常ヲ失ヒ。其平全ヨリ  
虧損スル所生シテヨリ已後。或ハ寢息スルコト  
興寤ヨリ過度シ。或ハ興寤常習ヲ越テ。寢息スル  
コト少キノ寢ヲ發スルニ至テ。然シテ後得テ言  
ヘキノミ。是故ニ縱へ人寢息ノ間平常ヨリ缺ル  
コト有ト雖モ大甚ナラス。或ハ動靜去為夕メニ  
スルコトアルカ故ニ。寢息ヲ妨奪スル者ニ至テ  
ハ。輒千名テ不寐ノ証トハ言サレナリ。只是其平

常ニ比シテ大ニ異ナルモノ。及ヒ内ニ患害アル  
 ニ因テ是ニ淵源シテ發シ来ル者ニ至テ。則チ始  
 テ是ニ蒙ラシムルニ本篇ノ病名ヲ以テスヘキ  
 ノミ。不寐ノ証。コレヲ過厄栗布尼亞ト謂フ。寢息  
 スルコトノ脱失セルノ義ナリ。

右第八十八章。不寐ノ大較ヲ論ス。

惚シテ諸般ノ心意ヲ勞動スルノコト。精神ヲ究  
 メ竭シ思慮ヲ運営スルノコト。身體ヲ使役スル  
 ノコト。疼痛スル所アル。熱飲ヲ用ルコトアル。自  
 餘カクノ如キノ類。皆能睡寐ヲ驅除スルノ原由  
 トナリナリ。○然ト雖モ其不寐ノ原由。明白ニ知

レタル者ヨリ。故ニ睡ヲ驅除シタル者ヲハ。彼ヨ  
 リ睡寐ノ催サ、ルニハ非スシテ。外ヨリ故ニ取  
 リ除ルコト故。斯ノ如クニシテ寐ルコトノ少キ  
 ニ至テハ。例シテ不寐ノ証ニハ屬セサルナリ。

右第八十九章。不寐ノ外因ヲ論ス。

予輩講明シテ其不寐ヲ為ノ原由ヲ得タルコト  
 アリ。決シテ其違ハサルコトヲ知ル。此其内因ハ。  
 皆是血中ニ水ガチナル稀淡ノ物加ハリ。又ハ腦  
 中ニ刺戟スルモノ有ニ。因テ。睡ヲ為スニ必ス須  
 ツ所ノ。腦中ヨリ灌注スル精氣ノ潮盈ヲシテ。自  
 由ニ度ニ適ヒ節ニ中ルコトヲ得サラシムルカ

故ニ。不寐ノ証ヲ發スルナリ。○是ヲ以テ其不寐  
ヲ為ス所ノ病原。疼痛煩悶及ヒ呼吸ヲ障礙スル  
等ノ外ハ。其因皆内原是ヲ諸液ノ稀涼ニナリタ  
ルニ得ルナリ。即チ其性兇惡ナルノ諸病。並ニ膽  
汁ニ於テ説クカ如クナル所ヨリシテ發スルナ  
リ。又ハ右等ノ物ノ酷厲ナルカ。其腦中ヲ攪擾ス  
ルニ因ルナリ。即チ彌延セシ長病ノ。性ヨリシテ  
衰壞セシ稀涼液ニ進ミ變シタル者ノ如シ。詳ニ  
上ノ第九十三章ニ於テ之ヲ説キヌ。又ハ腦ノ諸  
管ノ運動大過ナルニ因ル。是ヲ終件トス。即チ許  
多ノ諸熱ニ於ルカ如キ是ナリ。此皆不寐ヲ為ス

ノ内因ナリ。右第九十章。不寐ノ内因ヲ論ス。  
人ノ興寤シテ。凡百ノ事為言動ヲ作シ。視聽謀慮  
ヲ運用スルノ際ハ。幾多ノ精氣ヲ散盡スル者ナ  
リト知ヘシ。然トモ其散盡スルノ跡。未夕曾テ見  
レサル者ハ。體中諸藏ノ官能常ニ休息セスレテ  
夫ヨリシテ新ナル精氣ヲ製造シテ。能ク腦中へ  
上輸スルカ故ナリ。是故ニ睡眠ノ精氣ヲ養フニ  
於ル。最其須ワトコ口。精氣ノ銷耗ヲ紓メ息シテ。  
新造ノ相ヒ承繼スルヲ待テ。陳新相代リ。損益相  
償ヒ。缺乏ノ患ナカラシムル所以ノ者ナリ。然ラ

ハ則チ不寐ノ証ノ人身虚弱スルノ原ナルコト  
復思惟ニモ及ハス。病原ヲ他ニ求ルコトヲ假ラ  
スシテ。諸ヲ斯ニ知ルノミ。○唯是レ吾輩ノ不寐  
ヲ發スルノ諸因ヲ歴挙シテ。爰ニ意ヲ致ス所以  
ノ者ハ。病ニ臨ムノ工ヲシテ。證ヲ認テ以テ其原  
ヲ知ルノミナラス。因テ以テ據按シテ。適當ノ治  
術ヲ施設セシメシコトヲ要スルカ為ノミ。

右第九十一章。餘義ヲ申明ス。

寢息スヘキノ期ニ當テ寢息セサルコト。其為ニ  
スル所アリテ。求テ為ス者ニ至テハ。治法ノ與ル  
所ニ非ス。○若シ其証ノ心意ヲ勞動シタルヨリ

發リタル者ハ。是ヲ治スルニ只其勞心苦思ノ事

為ラ静定シ。以テ其心意ヲ動シ擾ラシムルコト

ナク。催睡薬少許ヲ用テ。以テ其久ク睡ラシテ。

精力悉ク銷耗衰敝スルヲ禦クヘキナリ。○其不

寐ノ來ル。氣息通シ難キニ苦ムコト。例スルニ胃

中水氣有テ充塞スルノ証ニシテ。患人唯其思欲

ニ隨フノ運動ヲ以テ。自ラ营救シテ然後ニ呼吸

ヲ為スコトヲ得ルニ賴テ。僅ニ閉塞ヲ免ル、ニ

出ルニ至テハ。則チ催睡薬祇ニ以テ其死ヲ致ス

ニ足ルノミ。此其人特ニ思欲ニ隨フ運動ニノミ

依賴テ呼吸ヲ為シ。以テ死セサルコトヲ得ルニ。

其茶却テ依頼トコロノ運動ヲ静息スレハ呼吸  
モ亦隨テ閉塞セシトスルカ故ナリト知ヘシ。百第  
五十八併○然トモ其發スルコト。曷カ郎ラ布ブ的テ列レ  
考スヘシ。○然トモ其發スルコト。曷郎布的列  
金キ屈クニニ詳シナナリリ。章章ノ運動ヨリシテ來ル喘急ニ於  
テ毎々發現スルカ如キハ。第百六十章則チ催睡  
茶ヲ用テ甚夕利アリトス。此其掌急牽掣ノ運動  
ヲ併テ。俱ニ是ヲ緩解スルカ故ナリト知ルヘシ。  
○若シ聖シ京キ健ゲヲ患ル人証候第三十七有テ。其中  
稀涼ナル性ヨリノ腐壞液アラント察スルノ証  
ニシテ。是ノ不寐ノ見ハルハ。乃チ宜ク催睡茶  
ヲ用ルコト。其服度ヲ小ニシテ。數度ニ分チ服セ

シムヘシ。夫ニテ全ク寐ルコトヲ得サルノ患十  
カラシムヘシ。即チ半時又ハ一時毎ニ。桂枝水若  
クハ蒲桃酒少許ヲ用テ。白罌粟ノ舍利別一匙  
ツ、飲服スルヲ妙トス。桂枝水製法遠西名物考  
ノ法第五十三章ニ見ヘタリ。或ハ右等ノ液。若ク  
ハ自餘強壯ナラシムルノ劑ヲ用テ。牢達ラウダツ扭ニウ謨モ律リ  
規キ需ス謨ム三四滴許ヲ服スヘキナリ。其強壯ナラシ  
ムルノ劑。第二十六章ニ出タリ。○爰ニ多ク人功  
ヲ盡スト雖モ。サシテ其益ナキハ。人ノ是ノ牢達ラウダツ  
扭ニウ謨モ律リ規キ需ス謨ムヲ製スルナリ。何ヲ以テ之ヲ言ハ  
。其方中泊夫藍ナラヒニ葛カ私シ多タ儂ラウ謨モ獸シ葛カ私シ多タ儂ラウ謨モ生シス

本草綱目 卷之六





ヲ見ハスニ至ントスルコトヲ恐ルヘキナリ。若  
シ幸ニ自然ト血ヲ催スコト有テ。夫ニ因テ將  
ニ來ントスルノ諸患ヲ障ヘ止ルトキハ。則チ後  
証ノ發スルコトハナキナリ。○其治法如何カ從  
事スヘキトナラハ。斯ノ如キ不寐ノ証ニ臨テハ。  
須ク瀉血ノ法ヲ施シ。而シテ第十二章ニ載ル運  
動大過ノ熱病ニ用ルノ劑ヲ與フヘキナリ。○廿  
テ其証同クシテ治大ニ異ナルモノハ。爰ニ論ス  
ル所ノ不寐ノ証ト。痘家ノ膿ヲ成スノ始ニ至テ。  
新ニ發熱シテ催ス所ノ不寐ノ証トナリ。何トナ  
レハ。痘家膿ヲ成スノ始ニシテ新ニ發熱シテ催

ス所ノ不寐ノ証ヲ。復爰ニ論スル所ノ証。及ヒ  
運動大過ノ熱病ノ証ヲ治スルカ如ク從事スル  
コトヲ逞クセス。只宜ク上ニ説與スル所ノ如ク。  
催睡菜ヲ用テ其睡ヲ起スヘキノコナレハナリ。  
若第九十二章。不寐ノ治法ヲ論ス。

卒厥篇第十五

卒厥ノ病。コレヲ設セ印イ哥ゴ百ヒャクト謂フ。其証ノ大較ヲ  
陳スルニ。若シ人偶タダ其倏忽トシテ意ノ趣キ為シ  
ト欲スルマ、ニ運動スルノ機關ヲ失ヒ。並ニ内  
ニ存スル心意精神。外ニ應スル思慮知識。共ニ之  
ヲ喪フコト。第八十三章ニ論スル私シ毫カウ布フ病ビョウ白ハク羅ラ  
ルル的テ。即キ卒ソツ中チュウ昏コン冒マウ不フ省シヤウ人ジンノ如キキノ之ノナラス。其呼  
事ノ証。詳ニ病考ニ論ス。人ノ如キノ之ナラス。其呼  
吸ナラヒニ外ヨリ診察スヘキ所ノ脉動皆絶シ。  
始死ノ屍ト殆ト辨別ヲ為スヘカラサルニ値ス  
コトアル。是其証ナリ。迺ナ子シ夫フノ拂フ毫カウ胡コ爵カク冒マウ不フ仁ジン  
等精神恍惚ノ一証ノ若キ。吾輩ニ於テ。是ヲ差等シ

テ較輕キ者ノ號トス。其証候一二ノ缺虧シテ。作  
為運用ノ崩壞脱失セル者ニシテ。唯其諸般ノ運  
動主能。悉皆廢絶スルニ至リ極ラサルヲ異ナリ  
トスルノ也。

右第九十三章卒厥ノ大較ヲ論ス。

此病ハ是特リ來ラス。是非ニ他病ト共ニ發スル  
カ故ニ。其徵候甚タ混淆シ。其混淆セル中ノヤハ  
目立タル証ニ就テ名ヲ蒙ラシムルカ為ニ。名モ  
亦浮游シテ的實ヲ得カタシ。夫故ニ名ニ據テ之  
ヲ求ルコトヲ為スヘカラス。須ク名ヲ捨テ、其  
實ノ原由ニ本テ之ヲ索メ。然シテ後夫ニ據テ以

按ヲ處シ治法ヲ議スヘキナリ。○吾人其生活ニ  
テ渝ラサル所以ノ者ハ。能ク稟資セル所ノ精神。  
箇ノ神經ヨリシテ。遍身諸部へ轉送スルノ間ハ。  
長ク其生ヲ失ハサルコトヲ知ル。○造物主ノ肇  
テ人身ヲ始資スル。其生命ヲ賦シ。生活セル元運  
ヲ與ル所ノ者ハ。固ヨリ思議ノ及フ所ニ非スシ  
テ。將夕其精神ニノ在ルヤ。抑又神經ニ在テ。神  
經其精神ヲ送ルヤ。若クハ神經精神トモニ是相  
須テ離レサル者ニシテ。精神ハ即是神經。神經即  
是精神ナリヤ。予此ヲ究メ極ルコト能ハスト雖  
モ。是ノ二ノ者甚的突彰著。吾人共ニ目今現ニ頼

ル所ニシテ。其精氣必ス神經ヨリシテ諸部ニ普  
達セサルコト能ハス。其生活ノ元運ヲ主ル精氣  
ノ循行ヲ失フノ各部ハ。必ス死絶スルニ至レハ。  
則其精氣ノ神經ヲ通りテ。諸部ニ普達スルニ頼  
ルコトヲ徵スルナリ。○精氣ノ循行ヲシテ障礙  
スル所アラシムルノ原由微甚アルニ從テ。或ハ  
僅ニ作為運用ノ崩壞脱失スルノ証ヲ見シ。前章  
謂拂フ或ハ全體へ普達スルヲ遏絶シテ。其間  
此ノ卒厥ヲ發スルニ至ルナリ。  
右第九十四章。卒厥ノ病因ヲ論ス。  
卒厥ノ心意ノ運動ヨリシテ發スルノ一証アリ。

卷之六 九十五

此ノ証常ニ多クアルコトナリ。假令ハ人ノ急遽  
 驚駭シテ自失スルコトアリ。又ハ精神志意大ニ  
 度ヲ失ヒ常ヲ變シ。周章恐怖スル所アリテヨリ  
 微ナルハ則チ拂<sup>フ</sup>寔<sup>ラ</sup>胡ノ証ヲ發シ。註上ニ出ツ。即  
 眩暈卒倒精神  
 証<sup>ト</sup>愧<sup>ニ</sup>等ノ甚ケレハ則チ卒厥ニ至ルナリ。時ニ因  
 テハ其終ニ死シテ蘇<sup>ソ</sup>リ復セサルモアル者ナリ。  
 ○此其精神ノ虧損シテ。其性ノ變壞セハ者ト。唯  
 其元運ノ過絶シタル者ト。身體中ノ主動。生平ノ  
 如ク運用スルコト能ハサルマテニ爾ク艱蹇ス  
 ル者トノ次第アルコトヲ知テ。其微甚ヲ辨スヘ  
 キナリ。○其卒厥ニ於テハ。生活ヲ為ス所ノ元運

モ心意ノ思欲ニ從フノ運動モ。皆能ク過絶スル  
 カ故ニ。因テ以テ領解スヘシ其心意ノ運動ヲ作  
 スコト大甚過度ナル者。乃チ能ク生活ノ元運ヲ  
 連テ之ヲ變壞スルコトヲ為シ。又悉ク過絶スル  
 コトヲ。○若シ卒厥ニ於テ。生活ヲ為スノ元運ノ  
 滯止シタルニ。惣體ノ良知悉皆脱去セサルニ逮  
 ブガ如キハ。乃チ其生氣ノ尚存スル諸部ニ刺戟  
 スルコトヲ為セハ。自ラ其運動ヲ増スナリ。否ハ  
 則チ細筋纖維復々相達スルコト能ハサルナリ。  
 良知<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>去<sup>リ</sup>。復<sup>タ</sup>生氣<sup>ニ</sup>脱<sup>シ</sup>了<sup>ル</sup>者<sup>ハ</sup>。刺<sup>ス</sup>戟<sup>ス</sup>ル<sup>コ</sup>ト<sup>ナ</sup>リ。  
 右ノ二証。俱ニ其心藏ノ運用。及ヒ動脈ノ循環

已ニ過止シテヨリ後モ。未夕久キラ經廿ルカ間  
 ハ。宜ク號嗥シテ救ヒ助ケ。以テ過止セル官能ヲ  
 挽回シテ。再ヒ運動スルニ復セシムヘシ。○是故  
 ニ是症ニ臨テハ。刺絡ヲ施シテ瀉血シ。菜ヲ以テ  
 鼻中ニ撒シ。顛顛ニ於テ一二ノ慄悍銳利ノ諸菜  
 ヲ摩擦シテ。之ヲ救ヘシ。即チ羅思馬理奴謨精。藿  
 香精。香撮皮精。硃砂精。自餘右等ノ品類ヲ用ヘキ  
 ナリ。○此等ノ病ニ臨テハ。人復夕發疱術アルヒ  
 ハ。下劑ヲ施スニ暇アラズ。第八十七章ニ於テ。發  
 疱術ヲ施シ並ニ下劑  
 ヲ用ルノ治法ヲ舉クルニ因テ爰何トナレハ。菜  
 ニ共異ナル所ヲ言テ之ヲ別ツ。爰何トナレハ。菜  
 ヲ施スニ製設煎煮ノ事ノ多時ヲ消スル有テ。又

其上ニ其菜氣ノ浸淫浹洽シテ背際ニ達スルコ  
 ト。俄頃ニシテ得ヘカラ井ルカ故ニ。若シ生活ノ  
 元運ヲシテ。爾夕長ク絶止セシノ置トキハ。復蘇  
 醒シ易カラズ。祇ニ是ニ因テ患者ヲシテ死ニ輸  
 サシムルニ足レリトスルカ故ノ也。  
 右第九十五章。卒厥ノ心意ノ運動ニ因ルノ  
 証治ヲ論ス。  
 若シ夫レ諸脱血過多。アルヒハ自餘ノ諸液大ニ  
 漏崩シテヨリ。此ノ卒厥ヲ發シタルハ。此其血ノ  
 分量。以テ頭腦ニ輸シ送ルニ足ラサルカ致ス所  
 ナリト察スヘキナリ。須ク患者ヲシテ頭ヲ置ク

コト卑カラシメ。以テ其血ノ流輸シカタキ者ヲ  
シテ。能ク其頭ニ致シ易カラシムルノ策ヲ為ス  
ヘシ。又須ク其手足ヲ摩循シテ。血脉ヲシテ心藏  
ヘ収リ入ラシムルヤウニスヘシ。又須ク其全腹  
ニ摠按シテ之ヲ緊撰固持スルコト。彼ノ彰著ナ  
ル産後ナラヒニ諸液脱泄ノ後。腹中頓ニ暴虚シ  
タルニ施スカ如クシ。以テ血脉大幹ヨリ血脉ノ  
云。詳ニ見ユ。解体腹圍ヘ散布セル支別ヲ障坊シテ。其  
血ヲ心藏ヘ収入セルムルノ術ヲ為スヘキナリ。  
○是証ニ臨テハ。瀉血ノ術ハ戒テ施スコト勿ル  
ヘシ。前章ニ対シテ。其異其鼻中ニ撒入スル諸策

ノ。上ニ列スル所ノ如キハ。則チ前ノ諸証ニ於ル  
カ如ク之ヲ施スヘシ。良トス。  
右第九十六章。卒厥ノ脱血ニ因ルノ証治ヲ  
論ス。  
兇猛熱病焚カ如キノ証ノ。究竟進テ壞液病ニ變  
スルコト。第二十五章ニ論シタルカ如キ者ナラ  
ヒニ酷烈ナル暑熱シ氣。及ヒ腐敗熱病。皆能ク卒  
厥ノ証ヲ發スル者ナリ。甚夕危殆ナリトス。○是  
証ニ臨テハ。宜ク其人ヲ移シテ。風氣爽涼ナルノ  
處ニ居シメ。而シテ冷水及ヒ醋ヲ以テ面ニ吹キ  
濺クヘシ。戒テ他ノ平常ノ卒厥ニ於ルカ如ク。諸

内科要略 卷之六 九十七 二十二

般ノ揮發散越ノ品。ナラヒニ慄悍銳利ノ菜。及ヒ其ヲシテ熱セシムルノ劑ヲ用ルコトヲ禁スヘキナリ。○若シ患人省復スルコトアラハ。乃チ更ニ其諸証ヲ治スルコト。第二十五章ニ於テ論説セルカ如クスヘキナリ。

右第九十七章。卒厥ノ大熱ニ因ルノ証治ヲ論ス。

卒厥ノ發スルコト。其原由ノ自ラ能ク明白ニシテ來ルハ。夏ノ暑カク。郎布の烈金屈ニ詳ナリ。○章ヨリシテ來ルノ一証ナリ。此ヲ子藏衝逆ノ証トス。即チ母兒私百尔等ト號スルコトヲ為セリ。其証候第

百十八章ノ註ニ出ツ。又第五。此其生活ノ元運ヲ抑壓シ。夫ヨリシテ遍體ノ運動。悉皆遏絶シ。只留得テ異政ノ運行ナル。胃ト腸トノ之絶止セサルコトヲ得ルナリ。此其神經ノ循行ヲ得ルコト關係ナクシテ。彼ニ交渉セサルヲ以テ免ルナリ。○然トモ其騷擾ノ波及スル所。其運行夫ニ付テ少シハ常ナラスシテ次序ヲ失フニ至ルカ為ニ氣ノ膈中ニ鬱蓄スルコトヲ致シ。摠体虚乏衰廢セルノ體中ニ於テ。問其噪聒スルノ響ヲ聞クカ如キノ証有テ。一二其處ニ厲惡ノ物精入テ存スル状ト每人以為ル。ニ至ルモノアリ。○此証ノ卒厥

ニテハ。其發スルコト甚夕屢ニシテ。大ニ疲極ス  
ルニ非ルヨリハ。死ニ至ルコト稀ナリトス。何ト  
ナレハ。生活ノ元運絶止スルモ。元來是精氣灌注  
シ入ルコトノ強甚ナルヨリシテ發スル曷郎布  
的烈金屈ノ。還テ自ラ為ス所ノ生氣ノ過絶ニ係  
ルカ故ニ。其解弛スル下モ。亦其自ラ為ス所ニ由  
ルヲ以テナリ。○若シ其曷郎布の烈金屈生活ヲ  
為ス所ノ精氣ヲ灌溉スルノ器ヲ抑壓シテ通セ  
シメサルコト。少シニテモ甘キ緩ムトキハ。忽ニ  
其精氣再ヒ復故ノ如ク前流スルカ故ニ。患人則  
チ省復スルナリ。○其卒厥ノ時ニ當テハ。患人ヲ

シテ然ルベキ走竄揮發ノ侵刺襲戟ヲ主ル菜劑  
ニ因テ。營救シテ蘇復スルニ至ラシムヘシ。此証  
ニ用テ曷郎布の烈金屈ヲモ治シ。又兼テ其厥証  
ヲモ治シテ。俱ニ經驗アルモノハ。即チ硝砂精。羅  
思馬理奴謨精。刺賢需辣精。藿香精。鹿角鹽。琥珀鹽。  
乾白揮發鹽。製法第八十七。葛私多。樓謨。丁竈。去。尔。  
葛私多。樓謨。丁竈。去。尔。○  
寓。特。尔。ハ。劑。ノ。名。速。西。名。物。考。ニ。出。ス。丁。等。是。ナリ。○  
此等ノ諸菜少許ヲ取テ。箇ノ鼻巾ニ加ヘテコレ  
ヲ鼻中ニ納シ。又ハ顛顛及ヒ額上ヲ摩擦シ。患人  
ヲシテ醒覺スルニ至ラシムベシ。○予是篇ニ於  
テハ。許多ノ單方菜味ヲ列挙スルコト。他篇ニ異

内丹經卷之六  
卷之六  
二七



ナル所以ノ者ハ。此急証ニ臨テハ。勿卒ノ際復思  
惟シテ其宜キ所ノ菜味ヲ撰用スルニ違アラサ  
ルカ為ニ。只其精要ナル者ヲ挙テ此ニ列シ。急求  
ノ時ニ臨テ他ニ求ルコトヲ俟ス。近ク斯ニ得セ  
使ント要シテ爾スルノ之。○夫人曷郎布の烈金  
屈ノコトヲ詳ニ知ント要セハ。下ニ於テ其原由  
証治諸般ノ種屬マデヲ記載セリ。以下二十三章就  
テ以テ其説ヲ觀スヘキナリ。  
二 右第九十八章。卒厥ノ曷郎布の烈金屈ニ因  
ルノ証治ヲ論ス。  
西説内科撰要卷六終

宇田川玄隨著

槐園藏板



寛政八丙辰歲孟春

東都書林

弘所 室町二丁目 須原屋市兵衛



